

さぬき市埋蔵文化財調査報告 第2集

さぬき市内遺跡発掘調査報告書

平成 16 年度国庫補助事業報告書

鶴の部山古墳
大串石切場跡

2005. 3

さぬき市教育委員会

さぬき市内遺跡発掘調査報告書

平成16年度国庫補助事業報告書

鶴の部山古墳
大串石切場跡

2005. 3

さぬき市教育委員会

序

さぬき市には先人の手によって築かれた文化遺産が数多くあります。その中で津田湾沿岸の古墳群は海運、停泊、水産を背景に君臨した権力者の墓として注目されており、津田湾は畿内勢力が地方に進出してきた窓口であったとする意見が出されています。このように古墳時代の歴史において津田湾沿岸の古墳群は非常に重要であります。

今回報告致します鶴の部山古墳は津田湾沿岸の古墳群の中では最も古い古墳と言われており、確認調査ではそれを裏付ける上器が出土しました。また、古墳の構造は香川県内の同じ時期の古墳と共通点が多いことから「在地的」な古墳であることが判明し、畿内勢力の進出を考える上で貴重な成果となりました。

大串石切場跡は中世の石造物が製作途中のまま石壁に残されているなど、良好な状態で石切道構が残っています。また、南北朝時代に鴨部社から京都石清水八幡宮に石材が運ばれた記録が残されており、それが大串石切場跡の石材である可能性もあることから、貴重な生産遺跡といえます。今回は北半分の地形測量を実施し石切場の構造が少しずつではありますが明らかになってまいりました。本報告書が埋蔵文化財の保護の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いと存じます。

最後になりましたが調査に当たりましてご理解とご指導をいただきました地元の皆様ならびに関係各位、また、調査にご協力とご援助をいただきました方々に厚くお礼を申し上げます。

平成17年3月

さぬき市教育委員会

教育長 田中 浩一

例　　言

1. 本書は、さぬき市教育委員会が平成16年度国庫補助事業として実施した確認調査並びに測量調査の報告書である。
2. 今回の確認調査はさぬき市津田町鶴羽1483-1に所在する鶴の部山古墳で、測量調査はさぬき市小田字松ヶ谷2671-92に所在する大串石切場跡である。
3. 調査の実施はさぬき市教育委員会が調査主体となり事をを、現場実務は大川広域行政組合埋蔵文化財係が実施した。また、大串石切場の測量は㈱イビソクに委託した。
4. 大串石切場跡の調査では保安林(保安施設地区)内作業許可を関連施設より得たものである。
5. 本書の編集作成は大川広域行政組合埋蔵文化財係松田朝由が行ない、遺構遺物の製図は多田歩、遺物整理は間嶋京子が行なった。
6. 鶴の部山古墳の報告で用いる方位の北は磁北で、大串石切場跡の報告で用いる北は国上座標第IV系の北である。縮尺は掲載図面内に掲載している。
7. 掲図の一部に国土地理院地形図「五剣山」「志度」「讃岐津田」(1/25,000),「志度町」「平面図7」(1/2,500)を使用した。
8. 遺物観察表及び土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1998年度版』を使用している。
9. 本事業及び本書の作成にあたっては、次の方々より多大なご指導・ご援助を得た。記して謝意を表します。(敬称略・五十音順)
香川県教育委員会文化行政課、香川県東部林業事務所、遠藤亮、大久保徹也、大嶋和則、大塚純司、大朝利和、大野宏和、大山真充、海邊博史、海邊麻理子、柏徹哉、片桐孝浩、鎌田敬子、亀井芳文、國木健司、藏本晋司、栗林誠治、佐藤竜馬、陶山仁美、多田伸吾、中山尚子、丹羽佑一、信里芳紀、乗松真也、藤川智之、松本和彦、六車ふみ子、森繁、森下英治、矢木和子、山西仁、山元敏祐、吉田広、山下平重、米田武子、渡部明夫

本文目次

序文	
例言	
鶴の部山古墳	
第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 古墳の立地と環境	2
第1節 鶴の部山古墳周辺の地理的環境	2
第2節 さぬき市津田町の歴史的環境	2
第3章 調査の成果	5
第1節 墳丘測量調査	5
第2節 前方部表面調査	9
第3節 トレンチの設定	10
第4節 各トレンチの状況	10
(1) トレンチ1	10
(2) トレンチ2	12
(3) トレンチ3	15
(4) トレンチ4	15
(5) トレンチ5	19
第4章 出土遺物	19
第1節 弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の出土遺物	19
第2節 古墳築造以降の出土遺物	20
第5章 まとめ	
第1節 鶴の部山古墳出土遺物について	23
第2節 積石方法の特徴について	23
第3節 後円部の形態について	23
第4節 鶴の部山古墳の歴史的位置付け	25
大串石切場跡	
第6章 調査に至る経緯と経過	27
第1節 調査に至る経緯と経過	27
第7章 周辺の環境	27
第1節 地理的環境	27
第2節 歴史的環境	28
第8章 調査の成果	30
第1節 石切場跡の範囲と石材搬出ルート	30
第2節 地形測量調査の成果	30
第3節 まとめ	30
図版	

挿図目次

第 1 図	遺跡位置図	1
第 2 図	周辺の遺跡 (1/25,000)	3
第 3 図	墳丘測量図及び主軸エレベーション図 (1/200)	6
第 4 図	前方部平面図及び主軸立面図 (1/60)	7 ~ 8
第 5 図	墳丘エレベーション図 (1/200)	9
第 6 図	トレンチ配図 (1/400)	10
第 7 図	トレンチ 1 平面図及び立面図 (1/40)	11
第 8 図	トレンチ 1 立面図及び断面図 (1/40)	12
第 9 図	トレンチ 2 上層小礫検出状況図及び断面図 (1/60)	13
第 10 図	トレンチ 2 くびれ部石積状況平面・立面・断面図 (1/40)	14
第 11 図	トレンチ 3 平面図及び立面図 (1/60)	16
第 12 図	トレンチ 4 平面図及び断面図 (1/60)	17
第 13 図	トレンチ 5 平面図及び断面図 (1/40)	18
第 14 図	弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の出土遺物 (1/3)	20
第 15 図	古墳築造以降の出土遺物 (1/3)	21
第 16 図	トレンチ全体図 (1/200)	24
第 17 図	遺跡位置図	27
第 18 図	周辺の遺跡 (1/50,000)	29
第 19 図	大串石切場跡と搬送ルート (1/10,000)	30
第 20 図	大串石切場跡北半地形測量図 (1/300)	31 ~ 32

表目次

表 1 遺物観察表	22
-----------	----

図版目次

図版 1-1	鶴の部山古墳全景 (南から)
図版 1-2	後円部 (東から)
図版 2-1	トレンチ 1 全景 (東から)
図版 2-2	トレンチ 1 半坦地 (北から)
図版 2-3	トレンチ 2 石列下バラス
図版 2-4	トレンチ 1 遠景 (東から)
図版 3-1	トレンチ 2 石列 (南から)
図版 3-2	トレンチ 2 石列 (東から)
図版 4-1	トレンチ 5 全景 (北から)
図版 4-2	トレンチ 3 全景 (北から)
図版 4-3	トレンチ 3 及びトレンチ 5 遠景 (北から)
図版 5-1	トレンチ 4 全景 (東から)
図版 5-2	トレンチ 4 近世石積断面 (南から)
図版 5-3	トレンチ 5 近世溝断面 (東から)
図版 5-4	トレンチ 5 近世石積 (北から)
図版 6-1	大串石切場跡上段 (北東から)
図版 6-2	大串石切場跡下段 (南から)

鶴の部山古墳

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

さぬき市津田町鶴羽鶴部 1483-1 に所在する鶴の部山古墳は鶴部山南側の尾根上に位置する前方後円墳である。墳丘は讃岐の前期古墳に多く見られる積石塚で、県内では東限になる。古墳周囲は日本武尊伝説が伝えられ、また、鶴の部山古墳自体もかつてのうご古墳と呼ばれており、地名の由来として「皇后」から来たとする説や「能褒野(のぼの)」から來たとする説があり古くから古墳に対する信仰・認識を窺わせる。平成元年2月には重要遺跡確認調査として墳丘測量調査が実施され、同年3月には津田町(当時、現さぬき市)指定史跡に登録された。

近年は開発が古墳周辺にまで及び、平成10年に古墳の立地する尾根の先端が住宅建設のため削られ、平成16年には前方部先端近くまで掘削が及び、後円部東側では仮設道がつくられた。このような経緯から、古墳の範囲を明示する必要性が生じ、墳丘測量調査並びにトレンチ調査を実施した。調査はさぬき市教育委員会が主体となり、大川広域行政組合埋蔵文化財係が担当した。確認調査体制は下記のとおりである。

(調査体制)

さぬき市教育委員会生涯学習課

大川広域埋蔵文化財係

課長 石原 新造

主任主事 阿河 錠二

主幹 木村 義行

主 事 松田 朝由

主査 山本 一伸

技 術 員 多田 歩

技 術 員 間嶋 京子

第2節 調査の経過

調査は平成16年9月27日から12月24日までの実働52日である。まず、9月27日から10月18日まで墳丘測量調査を行ない、確認調査は10月22日から開始した。トレンチ番号順に調査を進め、11月10日にはトレンチ2において後円部を巡る石列が確認できた。12月18日には現地説明会を開き調査の成果を発表した。12月24日に全ての埋め戻しを終え、調査終了となった。



第1図 遺跡位置図

第2章 古墳の立地と環境

第1節 鶴の部山古墳周辺の地理的環境

鶴の部山古墳が位置する鶴部山は津田湾の東端に突き出た岬で、南側は砂地が広がり、数十年前までは池が複数見られた。この辺りには『塩出』の地名が見られ、絶えず海水の流れ込んでいた様子が窺える。現在は陸続きとなっているが古墳時代当時は島か、それに近い状態にあったと推察される。鶴の部山古墳はこうした鶴部山の南端尾根上に位置し、島に築かれた古墳として説明されている。墳丘は人頭大の礫からなる積石塚で低地に立地している。これは県内の積石塚が安山岩の分布する高所に立地することから異質といえる。また、低地であるため周囲に安山岩が少なく、花崗岩をはじめとして様々な石材を使用している。次に古墳に使用されている石材に重点をおいて古墳周辺の地質構造について確認する。

香川県内は花崗岩が広く広がり、部分的に花崗岩を貫いて噴出した火山岩類がメサやビュート状の丘陵をなしている。津田町では北山、南瀧山、火山で火山岩類の堆積が見られ、標高200m以上の山塊として津田町を取り巻いている。鶴部山は花崗岩からなるが、北側の海に面した岩崖は局所的に古生代の堆積層が花崗岩の併入や貫入を受け雲母片岩となっている。

鶴の部山古墳は花崗岩の風化した花崗岩ブロック上に築造されている。積石に使用している石材は花崗岩、安山岩を主体として、雲母片岩、流紋岩、凝灰角礫岩が見られる。安山岩は北山、南瀧山、火山、雲母片岩は鶴部山北側の石材が想定されるが、注目すべきは高所に分布する安山岩に関して、鶴部山周辺まで転落してきたものを使用したのか、距離の離れた石材分布地から搬送したかである。現在の鶴部山周辺は花崗岩が大半で安山岩の散布は少ない。一方、古墳の積石は安山岩が花崗岩と同数近く確認できる。こうした相違に対して鶴部山周辺からさらに広い石材供給圏が想定できるかもしれないが、古墳時代当時からは現在の海浜部の環境は大きく変わっており、当時の状況を検討していくことが課題である。

第2節 さぬき市津田町の歴史的環境

さぬき市津田町は北西南が200m以上の山に囲まれ、東が海に向して孤立している。また、経済基盤は平地面積が狭く発達した砂丘が広がるため農業生産には不適な一方、海に面した特性をいかし、海運、水産、停泊が盛んである。このような環境の中から古墳時代には特徴的な古墳文化が展開する。

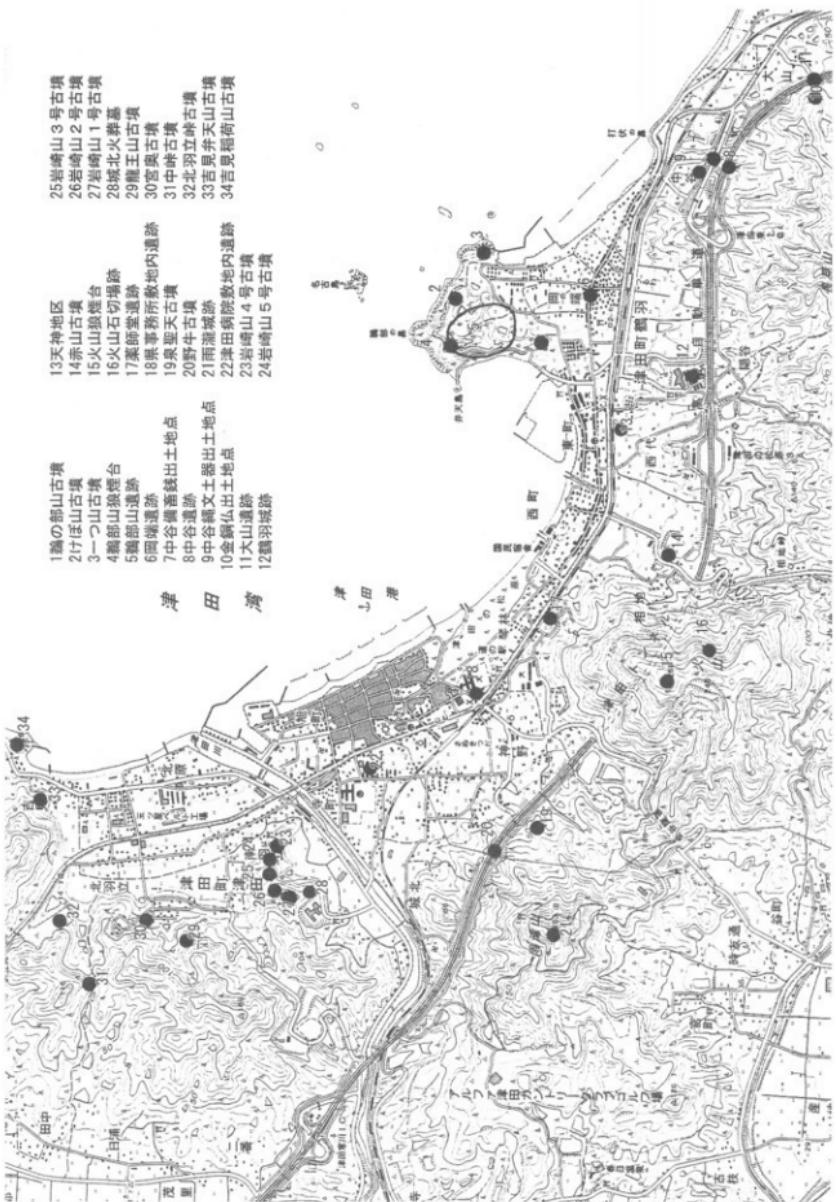
古墳時代以前から津田町の歴史的な経過を辿る。津田町において旧石器時代の遺構・遺物は未だ確認していない。縄文時代は岡の端地区や鶴部山で石器、石器が採集され、中谷地区、天神地区では縄文時代後期の土器片を、大山遺跡では谷部に堆積した二次堆積層から縄文時代後期の磨削縄文の深鉢を出土している。

弥生時代は北山山頂遺跡で石器や打製石包丁、磨削石斧、土器片が採集され、中期後半の高地性集落が発掘されている。また、南に下った北峯神社後方の巣中からは広形銅鏡3口の山上が伝えられている。大山遺跡では溝状遺構から比較的一括性のある後期後半の土器片が出土し、周辺では石器も採集されている。この他、神野の津田中学校西側で後期後半の土器片、南瀧山、神野、赤山、鶴部山、天神山等の各地で石器や石斧が出土しているが、豊六住居など集落を示す遺構は未だ確認されていない。

古墳時代は栗原堂遺跡や県事務官敷地内遺跡で古墳時代前期の土器を、鶴羽849番地で古墳時代後期の須恵器や製塙土器を確認し、さらに城北や岩崎山の麓、天神地区で須恵器の出土が伝えられている。ただ当期も明確な集落遺跡を確認するには至っていない。

一方、支配者の奥津城たる古墳は農業生産性の乏しいこの地で17基を認め、内5基が前方後円墳である。また、そのほとんどが古墳時代前半期に築造されており、確定な後期古墳は宮奥古墳1基のみである。

各古墳の分布は、津田川以北で2基、火山東部で3基の前方後円墳が見られることから、2つの小群に分けて説明されることが多い。津田川以北では岩崎山4号墳(全長52m)と北羽立峰古墳(全長42m)が前方後円墳で、埋葬施設にそれぞれ豊六式石槨と箱式石棺をもつ。円墳もしくは壇形の不明瞭な小形墳として吉見稻荷山古墳、吉見弁天山古墳、中峠古墳、龍王山古墳、岩崎山1~3・5号墳があり、多くが埋葬施設に箱式石棺をもつが、龍王山古墳は長さ5.9mの狹長な豊六式石槨である。火山東部では鶴部山に位置する郡山古墳(全長30m)とけば山古墳(全長57m)、火



第2図 周辺の遺跡 (1/25,000)

山東麓の赤山古墳（全長 55 m）が前方後円墳で後二者には後円部頂に竪穴式石槨が指摘されている。一つ山古墳は円墳で埋葬施設は箱式石棺である。野牛古墳と泉塩天古墳は2つの小群の境界付近である津田川の南、火山の西に位置する。両者ともに小形墳で埋葬施設に箱式石棺をもつ。以上、墳形と埋葬施設は必ずしも一致しないが、おおよそ前方後円墳で竪穴式石槨を用いた大形墳と円墳で箱式石棺を用いた小形墳に分類される。

次に当地域の古墳の特徴を見ていく。第1に海との関わりがある。六車惠一は農業生産力の乏しい一方で海との関わりの大きい地理的要因を挙げ、海運、停泊、水産を背景に君臨した首長の墓と評価し（六車 1965），古野徳久は海との関わりとして複数の古墳から出土している貝器や漁労具の副葬品を指摘している（古野 2000）。貝器は岩崎山1号墳から月日貝製貝器、岩崎山4号墳からイモガイ釧が、漁労具は野牛古墳からヤス・ハリ状鉄器、岩崎山15号墳からヤス状鉄器と形態の似る鉄器が出土している。

第2には火山で採石される凝灰岩が複数の古墳の埋葬施設に見られる。剣拔式石棺として岩崎山14号墳に1基、赤山古墳に3基、竪穴式石槨の天井石として岩崎山4号墳とけば山古墳で見られすべて前方後円墳で用いられている。他地域では岡山県備前市鶴山丸山古墳、徳島県鳴門市大代古墳、大阪府岸和田市久米田貝吹山古墳に石棺として使用され、石材と海運を掌握した前方後円墳被葬者像が浮かび上がる。

第3として埋葬施設の長軸を東西に指向する県内の他の古墳に対して、当地域では南北に指向している（玉城 1985）。古瀬清秀は他地域に比べて副葬品が豊富で竪穴式石槨が狭長なことから、在地色が窺えず、畿内地方の首長墓に共通するとし、当地域を畿内勢力の地方への進出と勢力拡大政策の窓口として位置づけている（古瀬 2002）。

第5に前方後円墳が交通の要所に位置する。北羽立岬山古墳は鶴部に抜ける羽立岬の手前、岩崎山4号墳は神前に続く津田川に張り出した尾根に、鶴の部山古墳とけば山古墳は津田瀬東端に突き出した鶴部山に、赤山古墳は大川町に抜ける相地岬の手前に位置し、外界に対する意識や地域的なまとまりの表出が推察される。

古墳時代中期以降、古墳はほとんど築造されなくなる。こうした背景には内陸部の大川町宮田に出現した全長 139 m の前方後円墳、富田茶臼山古墳の存在が指摘されている。津田町の古墳群が在地色を失い畿内色のつよい富田茶臼山古墳へと発展していったことが指摘されているが、その背景にある人の動きや社会変化はさまざまな解釈が展開している。

続く古代、当地が多和郷と呼ばれていたことが10世紀中頃に成立した『和名抄』や安楽寺院文書康治2年(1143)8月9日の「太政官符」に窺える。そして、安元2年(1176)の八条院領目録の京都蓮華心院領には「鶴羽」の記載がみえる。蓮華心院は貞安4年(1174)に建立されており、12世紀末に多和郷から皇室領・園として鶴羽莊の出現したことが解る。この時期の遺跡としては隱谷遺跡で包含層が確認され、津田病院敷地内からは須恵器長頸瓶が出土している。また、岩崎山古墳群の位置する尾根を南に下った斜面からは土師器甕・鍋による火葬墓が確認されている。集落等は他の時代と同様に不明瞭である。宗教施設としては延喜式内社に多和神社が見られるが所在地は明らかとなっていない。9世紀もしくは10世紀には石清水八幡宮が勧請されている。『宝鏡院古曆記』には天暦4年(950)から永正6年(1509)の間に10回遷宮があったと記されている。この他、中世には成立している寺尾千家や峯寺庵寺が古代までさかのぼる可能性があるが不明である。

中世に至り、蓮華心院領鶴羽莊の本家は後鳥羽天皇の皇后春草門院、順徳天皇へと移り、承久の乱で一時期幕府に没収された後に再び高倉院守貞親上へ返還される。そして、貞応2年(1223)安嘉門院邦子内親王に移り安嘉門院領となり、龜山上皇を経て後宇多上皇と昭慶院皇子恒明親王に移り昭慶門院領となる(1305年)。続いて後醍醐天皇に移り南北朝時代を迎えるが、この後の動向については不明である。文献上ではその後、文安2年(1445)『兵庫北闇入船納帳』に船籍地として『鶴著』の名が見える。遺跡としては大山遺跡で13世紀前半から中頃の柱穴、土坑、溝状遺構などが検出され、瓦器、十師質土器、東播系須恵器、中国産輸入磁器、東海系山茶碗、土鍾が出土している。また15世紀中頃から16世紀には土葬墓がみられ、五輪塔の火輪を伴う。さらに大山遺跡の近くでは鎌倉時代の金剛仏が昭和6年に発見されている。中谷遺跡は13世紀前半から中葉の掘立柱建物跡や土坑が検出され、瓦器、十師質土器、須恵器、土鍾などを出土している。また、中谷遺跡の前面では備前焼窯に埋納された漢～元までの中国陶7431枚が出土している(中谷備前窯出土地)。最も新しい貨幣は至大通寶で1310年、備前焼の年代が14世紀後半から15世紀前半である。中世の遺物としては他に岡の端遺跡、鶴の部山古墳、神野、城北に見られ、石造物は町内に点在している。城跡としては15世紀中頃に讃岐国守護代安窓氏の居城雨滝城が雨滝山に築かれ、鶴羽字天神には鶴羽城が伝えられている。

近世は海岸線にせり出した火山を境に津田村と鶴羽村に分かれる。その境界付近に津田八幡宮を遷宮、津田の松原が形成される。近世末には鶴部山と火山に狼煙台が設置されている。

第3章 調査の成果

第1節 墳丘測量調査

鶴の部山古墳の墳丘測量は平成元年に香川県教育委員会によって行なわれ、今日までに17年が経過した。この間、特に近年、開発等により古墳周辺の変化が進行したため、現状把握を目的に今回再び墳丘測量調査を実施した。調査は平板測量で1/50、20cm等高線図を作成した。

まず、平成元年時から現状変化した箇所を確認する。大きな変化は「墳南側及び東側である。古墳の南は平成元年時では前方部先端から尾根の先端まで約20mあったが現在は前方部先端まで開発され先端の右列がかろうじて残っている状態にある。前方部東の南半は平成元年時には既にL字状に掘削され、前方部東側の右列の直前にまで及んでいた。こうした状況は現在も大きく変化していない。後円部東は平成元年時では墳丘からのゆるやかな傾斜が見られたが、現在は古墳に隣接して板設道が設けられている。発掘調査では板設道東端が平成元年時の地表面から約2mの高さで造成され、古墳側は標高8mラインに及んでいることが確認された。後円部北東は標高8m付近で平坦地となっており、こうした状況は平成元年時も同様である。この平坦地について発掘調査では造成上と確認でき、地山は60cm下方の標高7.4m前後であった。山頂北側や墳丘は等高線等に大きな差異は認められない。

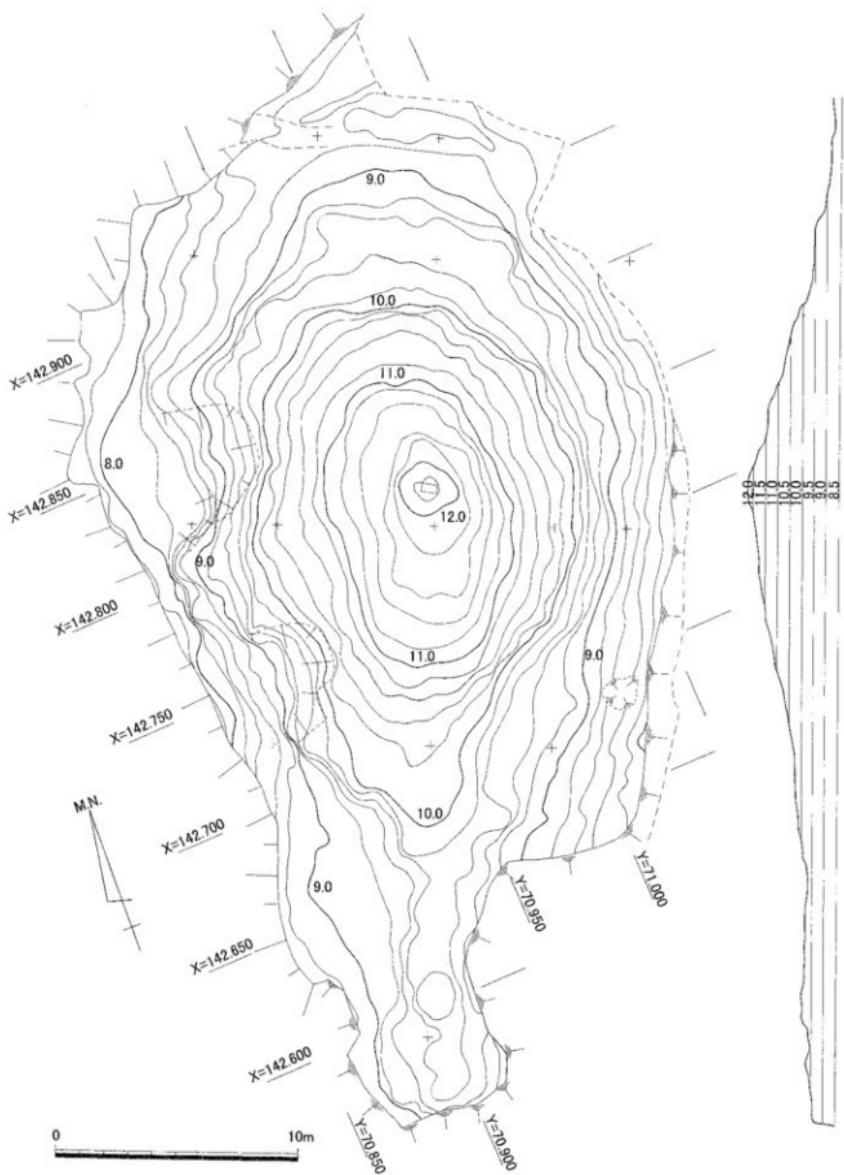
次に墳丘の特徴を見ていく。まず、墳丘の周囲には部分的に平坦地が見られる。前方部西側では前方部先端付近からくびれ部にかけて最大幅5m、後円部東側から北側は後円部を取り巻くように最大幅3mで見られる。特に後円部北東付近から平坦地外側のラインは直角に屈曲し、後円部北側では方形状の張り出しを呈する。北西側の屈曲部には平坦地に直交して溝状の窪みが見られ、平坦地にいたる登り口となっている。くびれ部東側では最大幅2mの平坦地が後円部東側にかけて狭まり、後円部の最も張り出す地点ではかろうじて平坦と認める程度である。そこから北側にかけては再び幅を広げながら後円部北側の平坦地に至る。後円部西側は擾乱のため判然としない。前方部先端は開発により現在は確認できないが、平成元年時の測量図からは幅1m程度の狭い平坦地が看取される。さて、これら平坦地はおよそ標高9mであり、発掘調査によって古墳のベース或いは地山であることが判明した。のことから、古墳築造に際して土台として上面を平坦に整形した可能性が推察される。墳丘はこの土台の上に築造されるが、後円部東側は土台から下った斜面上まで墳丘が及んでいる。一方、後円部西側は墳丘の外側に標高9mラインが認められるが、擾乱等が顕著なため平坦地の存在も含めて今後の課題である。

後円部の形状は東側が正円に対して西側は橢円形を呈する。また、後円部東側では墳丘裾から標高10～10.5m付近まで約30°の急傾斜となっている。この標高は後円部北側及び西側では墳丘裾から墳丘の立ち上った地点に相当し、ここで一旦高さを揃えた可能性がある。墳丘東側の急傾斜が目立つのは墳丘裾の標高が北側で9m、東側で8.5mと異なり高さを一定にするために東側斜面の幅を広くとっているからである。標高10～10.5mから上位は25°の傾斜で幅約2mにわたって緩く立ち上がり、その上は再び傾斜変換を認め急となる。そして後円部頂部の石祠を中心とした径3～4mの範囲ではさらに高さ50cm程度のマウンド状を呈する。以上、後円部は総計3点の傾斜変換点が見られる。一方、後円部南側はなだらかに前方部へと接続し、明確な傾斜変換点は認められず、後円部東、西側の傾斜変換点は後円部南側に至り収束している。

くびれ部西側では後円部から張り出す平坦地が認められる。後円部との接続は平坦地北西の5×3mの擾乱により判然としない。なお、このような平坦地はくびれ部東側ではなく、墳丘は左右非対称である。

前方部の状況は次節にて触れたい。

後円部北側の墳丘外では古墳に平行して若干の窪みが認められ、古墳を自然地形から断ち切る掘削の可能性が考えられた。しかし、トレーニング調査の結果は近世段階の溝状遺構を1条確認したのみであった。



第3図 境丘測量図及び主軸エレベーション図 (1/200)



第4図 前方部平面図及び主軸立面図 (1/60)

第2節 前方部表面調査

前方部は前端と東側が開発によって破壊の危機に瀕している。また、前方部が本来的に低いことに加え石材の抜き取り等による低平化も進行しつつある。そこで今回、前方部の現状を平面図、立面図として記録することとした。平面図、立面図は1/10で作成した。また、立面図は墳丘東側と前端部を作成した。

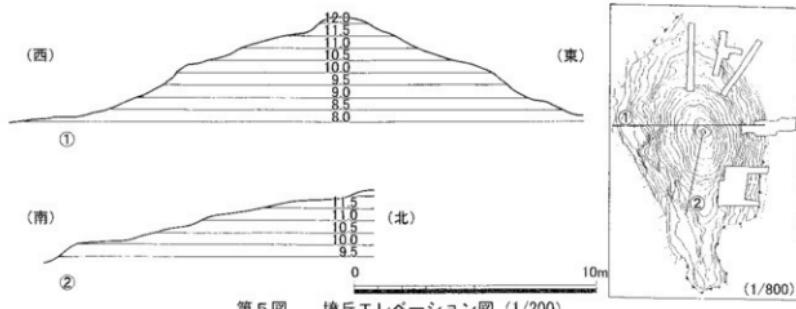
東側における前方部と後円部の境界は今回の発掘調査によってトレンチ2の北壁から13右目の石列と判明した。この地点から前方部先端までは17.8mを測る。幅は前方部先端で約4m、前方部先端から約9m北(前方部中央付近に相当)で最も狭く幅約2mを測る。石積の裾は東西南で水平で標高約9.5mを測る。

前方部東側は後円部との境界付近から前方部中央に向けて直線的にすぼまるが、石列は不明瞭である。前方部中央から先端にかけては再び幅を広げ、前方部先端から約5.5m北の範囲には石列が確認できる。一方、前方部西側の後円部との境界は張り出し状の平坦地が見られる。現状では裾に石列ではなく、削石や塊石が急な傾斜面に確認できる。張り出し部から前方部中央にかけては直線的にすぼまる。前方部中央からは東側と同様に再び先端に向かって広がる。石列も東側と同様に先端から約5.5m北の範囲で認められるが、石列の広がりは東側に比べ西側がゆるやかである。さらに、西側では前方部中央付近から先端にかけて地山削り出しによる斜面が認められる。このような削り出しが前方部先端にもかつて認められたが、古墳築造期と断定はできない。

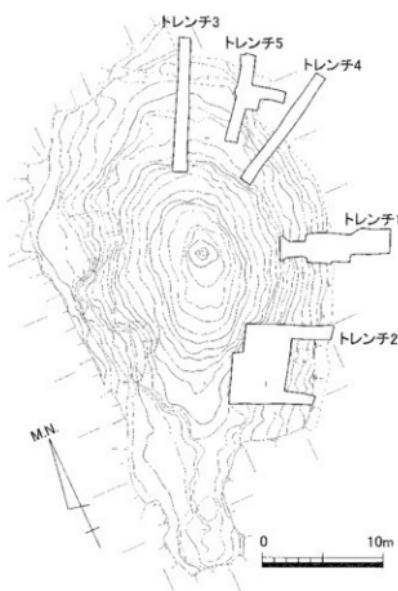
前方部先端から約4m北側では2×2mの方形形状の高まりが見られる。主軸の断面は方形形状の高まり付近から徐々に高くなりその南端で最高位となる。その先は約30cmの段差をもって落ち、そこから前方部先端までほぼ水平である。この方形形状の高まりには塊石や削石の小礫が集中しており、東、南、西の各辺にそれを囲むように石列が並べられ、下位の石列と2段になっている。なお、この石列の下部にも小礫が確認できる。さて現状では、この方形形状の高まりの時期を古墳築造時とすることは困難である。なぜなら、西側の石列に他の石積では確認できない火山の凝灰岩が見られるからである。この石材はしばしば中世石造物として使用されており、墳丘上にも数ヶ所に部材が認められる。この石列の凝灰岩を石造物片と断定することもできないが、後世に造作された可能性が十分に考えられる。

方形形状の高まりの他に小礫集中箇所は前方部先端から11m北側で認められる。不定形ではあるがおよそ3×3mの範囲である。このすぐ南側は堆積土が顯著で、墳丘外に散乱している石材も多い。この付近の等高線は急速に主軸側に向かってすぼまり前方部幅が最も狭く、比高差も小さいことから前方部を跨ぐ通路として利用されてきたことが推察される。またこの地点は墳丘が後円部からゆるやかに下り水平となる場所で、北西にはくびれ部西側の張り出し状の平坦地が隣接し古墳祭祀の儀礼の場として使用された可能性も高い。ただ、この小礫集中箇所も方形形状の高まりと同様に古墳築造時と断定はできない。なぜなら東側のトレンチ1で中世の古磁が出土し、南側の石積から土師質土器足釜の脚部片が出土しているからである。ここでは、この2地点の小礫集中箇所はとともに前方後円墳の重要な場所に位置していることを指摘しておきたい。

前方部の石積に使用されている石材は安山岩、花崗岩を主体として、雲母片岩、流紋岩、凝灰角礫岩が若干見られる。



第5図 墳丘エレベーション図 (1/200)



第6図 トレンチ配置図

平坦地から東は 24° の傾斜で下り再び平坦地に至る。傾斜面の幅約2.8m、上下位の平坦地の比高差約1.5mを測る。この範囲の石積はトレンチ南側で古墳のベースが露出している。ベース面には2箇所拳大の穴が見られ、石材が後世に抜き取られた可能性があるが、本来的に南にかけて石積が希薄になっている可能性も考えられる。石積は下位の平坦地の東端まで認められる。平坦地西端の傾斜変換付近には傾斜に直交して5石の石列が見られる。南側の石材が北側の上に重ねて置かれており、北から南にかけて設置されたことがわかる。なお、この石列も傾斜面の石積と同様にトレンチ南側で見られなくなる。

石積の裾には石列が見られるが、石材下の根のためいびつである。石列はトレンチ北側から長軸を正面にして外方に向け直線的に並べられ、トレンチ中央付近で角度を変え、2段積みで墳丘側に向かっている。

下位の平坦地から東は再び傾斜し、数ヶ所の傾斜変換を認めながらトレンチ東端へと至る。この付近は仮設道の下に当たり、トレンチ東端では約2mの造成土が見られる。石材はこの傾斜面にも見られるが、上位に比べて礫が小さい。また、礫の下位に厚さ20cm程の灰褐色土が堆積しており、転落石と判断した。

次に石積方法を見る。断割りの結果、石積は1~3段に重ねられており、下層の石積は間隔をもって石材が置かれ、石材間には褐色土が充填されていた。また、墳丘底石の下位には褐色土と小礫がパラスとして敷かれていた。石積方法は多くが平らな面を下にしているが、中には縦に立てかけているものもある。石材の種類は安山岩と花崗岩を主体とし、若干雲母片岩や凝灰角礫岩が見られる。

遺物は弥生時代終末期から古墳時代前期初頭の土器片が古墳のベース上や褐色土、石材下、ベース内のさまざまな箇所から確認され、古墳築造前の遺物の存在が想定された。出土傾向としては傾斜面の古墳ベース上で多く、上位平坦地付近の表土では皆無であった。なお、古墳築造後の遺物として石材間の表土から須恵器腹片が1点出土している。

第3節 トレンチの設定

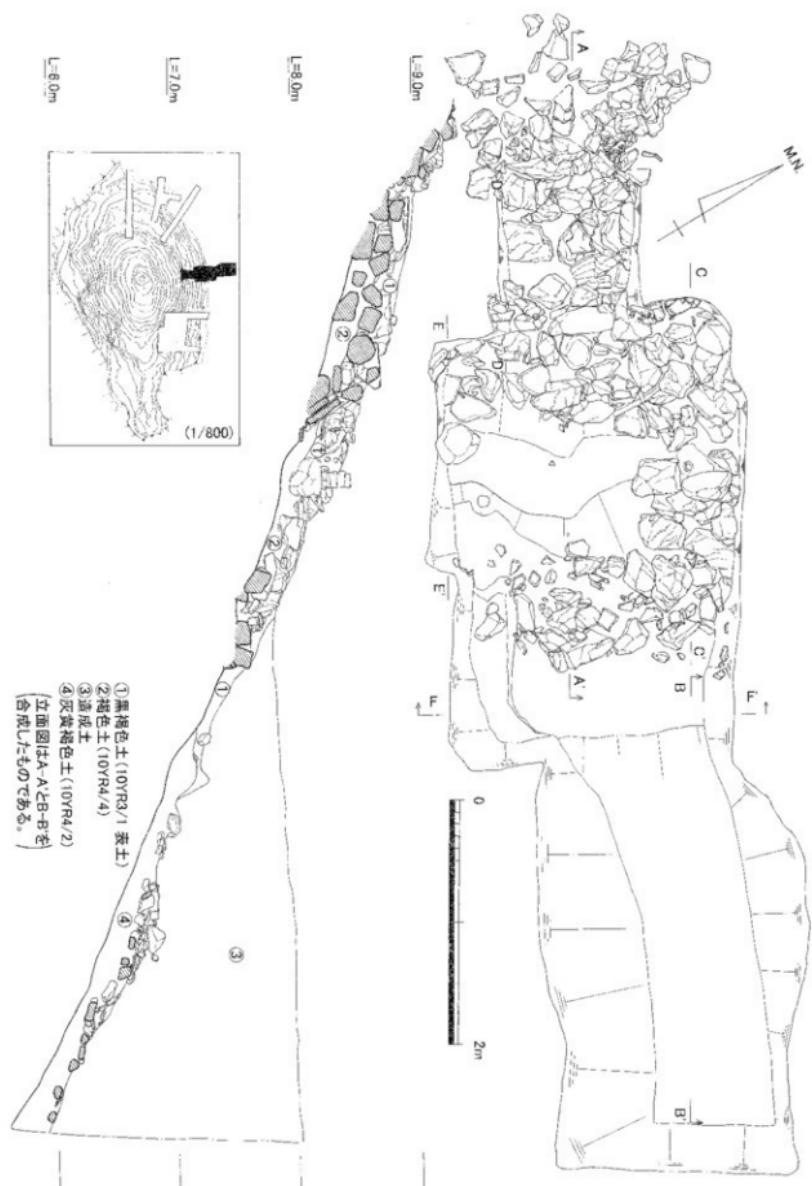
古墳の範囲と石積方法の把握を目的として、今回は特に後円部東側に重点をおいてトレンチを設定した。後円部東側にトレンチ1、くびれ部にトレンチ2、後円部北側にトレンチ3を、補足として後円部東から北にかけてトレンチ4、トレンチ5を設定した。

第4節 各トレンチの状況

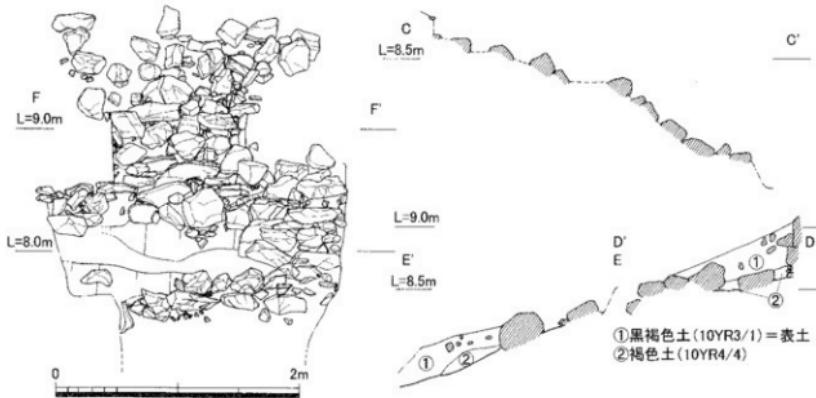
(1) トレンチ1

後円部東側の古墳の範囲と石積方法の把握を目的として、墳丘頂部の石祠から東に下った地点にトレンチ1を設置した。後円部東側で最も墳丘の張り出す地点はトレンチから1~1.5m南の基準杭(P10)付近でトレンチ設定箇所からは若干南にずれる。トレンチは墳丘の立ち上がり付近を基点として、東側に長さ8mで設定した。幅は1.2~2.5mである。

表土である黒褐色土は小礫を多く含み20~30cm堆積している。小礫は安山岩、花崗岩を主体とした塊石や割石である。表土を除去すると拳大から人頭大の石積が見られる。石積は墳丘立ち上がり付近であるトレンチ西端で約 30° の傾斜が見られ、その裾から東は幅50~60cmの平坦地となっている。平坦地は南側2段、北側2~3段の石積で南から北にかけて傾斜している。



第7図 トレンチ平面図及び立面図 (1/40)



第8図 トレンチ1 立面図及び断面図 (1/20)

(2) トレンチ2

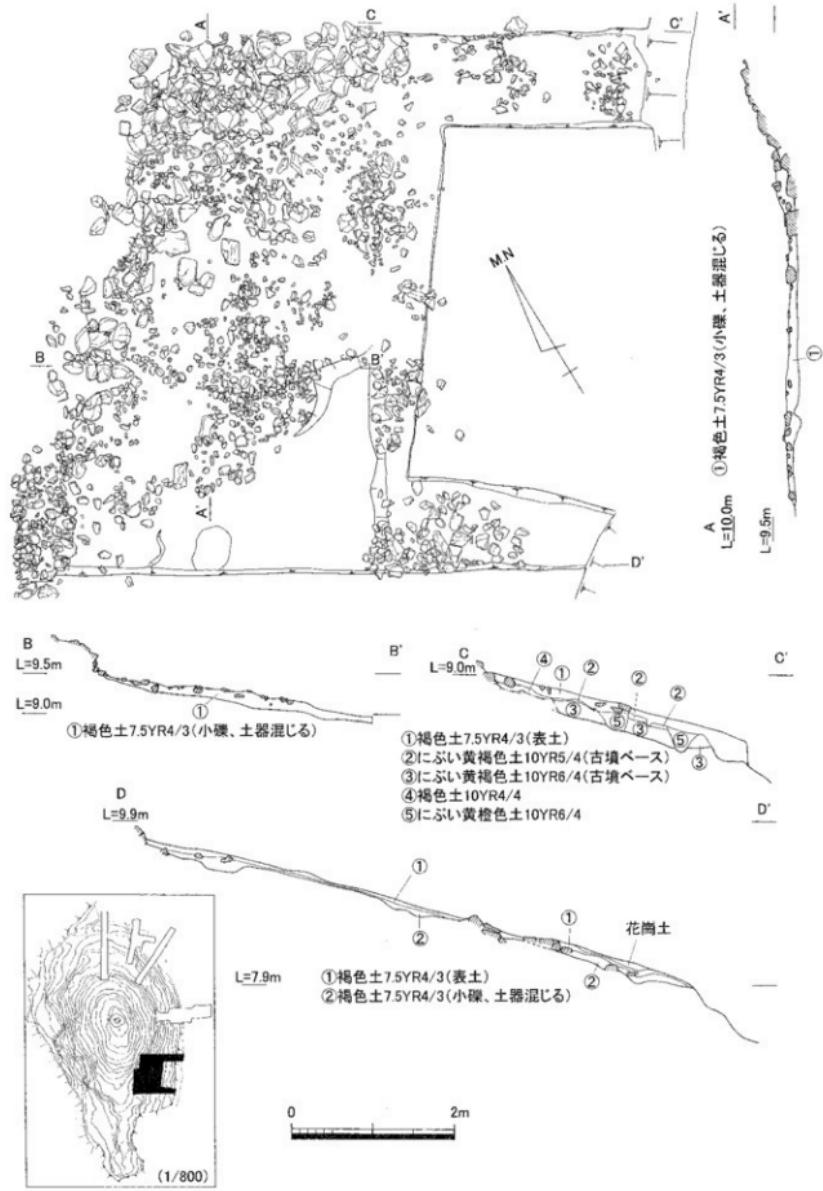
東側くびれ部付近には平坦地が見られ祭祀の行なわれた可能性が推測されたため、その状況確認を目的としてトレンチ2を設定した。また、かつてこの場所には建物があり、後円部の一部が直角に改変されていた。調査ではこれを利用して埴内の方を何うことにした。トレンチはくびれ部と平坦地、そして後円部改変部分を含めた 4.5×6.5 m の方形で設定し、さらに、トレンチ1で從来考えられていた埴内裾から下位で石積が確認されたことやトレンチ2の南東隅で東側に続く石積が確認されたことから、トレンチ東側の北端と南端を約3 m 東側に延長した。

表土はトレンチ1と同じく小礫混じりの褐色土であるが、トレンチ1よりも小礫の密度が高く、一旦小礫の検出を行なった。小礫はトレンチ全体に認められるが南側ではやや少ない傾向にある。石材は花崗岩、安山岩を主体とした塊石や割石である。トレンチ南東隅では斜面に直交して深さ 20cm 程の落ち込みと拳大の礫が確認されたが、礫に混じってビニール片や煉瓦片が見られたことから近年のものと判断した。平坦地の小礫中からは中世の青磁や青釉土器、土師質土器が出土し、小礫の堆積が古墳築造に伴わないことが解った。この小礫は後円部改変部分にまで及んでおり、改変後に敷かれたものと考えられる。

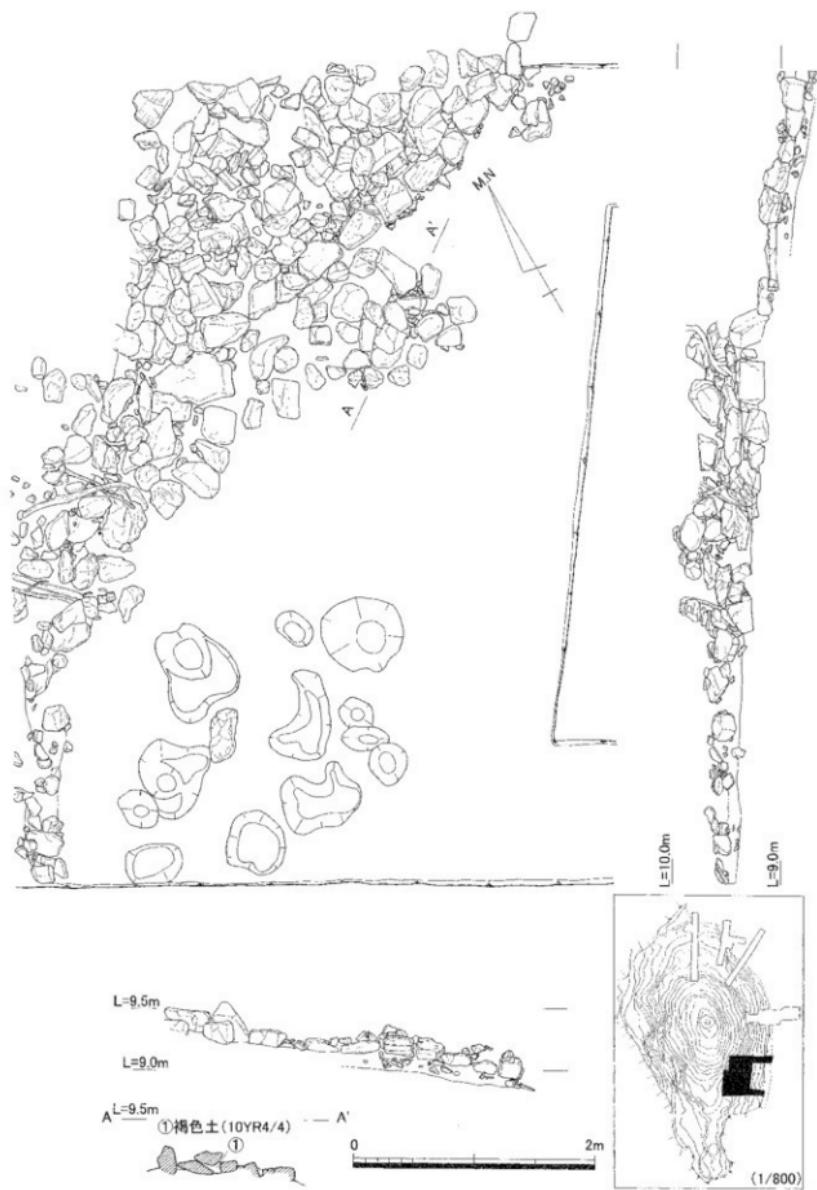
小礫混じりの褐色土を除去すると古墳のベースが検出され、後円部では良好な石列が確認できた。石列は検出したトレンチ北端から 11 石目までは曲線をもって平らな面を下に、長軸を正面にして並べられていたが、次の 12 石目は 13 石目の石材に持たれかけるように斜めに置かれている。そして、次の 13 石目は非常に大ぶりな石材である。12 石目までは曲線的に石列が見られ、石材の法量が長さ 30cm、高さ 10cm、厚さ 20cm とおおよそ均一なのにに対し、13 石目以降は石列が不明瞭で石材の大きさや置き方にばらつきがある。埴内全体ではこの地点が後円部と前方部の境に位置していることから 13 石目が前方部と後円部の基準となっている可能性が考えられる。13 石目以降の石積は前方部の中心に向かって直線的にすぼまっているが、後円部と前方部の屈曲点がくびれ部ではなく、前方部途中にある講岐の前方後円墳の特徴を示しているといえる。

トレンチ北端から 2 石目は 3 石目以降の列から数 cm 前に追跡している。トレンチ北端の石材 (1 石目) やトレンチ外で表面に露出していた石列もこの 2 石目に合わせて曲線的に列をなしていることから、上圧による変化とは考え難く、作業単位の変化、もしくは石積工程状の要因により意図的に置かれたものと考えたい。石列が置かれているベースは西から東にかけて徐々に傾斜し、トレンチ北端から 5 石目で特に顕著になる。こうした地形が関連する可能性もある。

石列の下は小礫を含む褐色土がバラス状に敷かれており、トレンチ北端の土層では石列の外側まではみ出していることが観察できた。また、石列の内側にも同様に見られることから、石積の前に広範囲でバラスの敷かれていた可能性が指摘できる。



第9図 トレンチ2 上層小砾検出状況及び断面図 (1/60)



第10図 トレンチ2 くびれ部石積状況平面・立面・断面図 (1/40)

後円部石列の前面には人頭大から拳大の集石が認められる。調査ではこの集石が古墳からの転落石である可能性と埋葬施設に伴う遺構の可能性を想定して一部断ち切った。その結果、集石は古墳のベース上や小礫を含む褐色土の上に置かれていたことから、転落石ではなく古墳築造時のものと判断した。ただ、その性格については埋葬施設等の掘りこみではなく、また、石疊状の通路の可能性も推測されるが上面はそろえられておらず、今後の課題である。

後円部改変部分の断面観察からは石垣状の石積は確認できなかった。また、石積内部は土砂が見られず、隙間が空洞なことから、従来の指摘どおり墳丘は石材のみで築造していることは確認できた。

平坦地では遺構は見られず、古墳のベースが広がっていた。南側ではベース上に窪みが凸凹状に見られたが、この窪みの埋土から現代の鉄片が出土したことから、近年の改変と判断した。

遺物は弥生時代終末期から古墳時代前期初頭の上器片が散見される。出土状況は、ベース上や小礫中から主として山上しているが、トレンチ北端の断面でベース内からも土器片が複数確認され、トレンチ1と同様、古墳築造前の遺物の存在が想定される。

(3) トレンチ3

後円部北側の様子と範囲を目的にトレンチ3を設定した。後円部北側は比較的明瞭に墳丘の裾が見られるが、墳頂部の石祠から北に下った地点から西に約5mの範囲では直線的な墳丘ラインが見られ、石積が急傾斜となり他所と異なっていた。また、後円部外には後円部東から続く平坦地が後円部北側に至って方形形状の張り出しを呈し、その北側のラインが後円部のラインに平行して直線的になっていた。その西側は平坦地に至る窪みが見られ、登口の可能性が推測される。調査ではこの方形形状の張り出しの性格を明らかにすることも目的とした。さらに、張り出しからさらに北側では地形が若干窪んでおり、古墳と自然地形を打ち切るような掘切の可能性を想定し、こうした遺構の有無も目的の一つとした。

トレンチは石積の明瞭に観察される立ち上がりの裾を基点として北側に長さ10.8m、幅1.2mで設定した。

表上は小礫混じりの黒褐色土でトレンチ1、トレンチ2と共に通する。小礫の密度が高く、小礫の検出を行なった。小礫は方形形状の張り出しの北端まで密に確認でき、そこから北側はほとんど見られなかった。表上と小礫は混ざりあいバラス状を呈している。この小礫は後円部の立ちあがりまで及んでおり、直線的な墳丘ラインに対して小礫の敷設は後出することになる。ただ、小礫中からは弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の上器片1点のみの出土で、時期を示すような十分な資料は得られなかった。

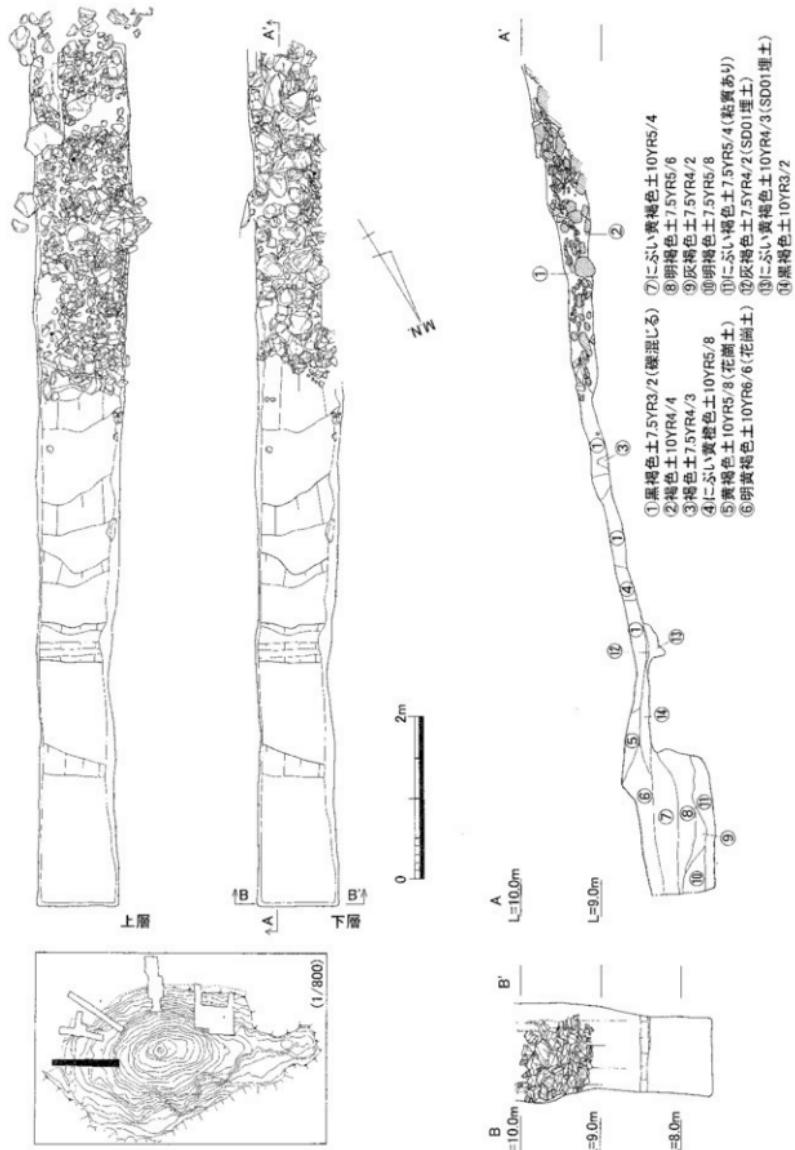
小礫を取り除くと人頭から拳大の石材が小礫の散布範囲とほぼ重なって検出された。これらは褐色土と混ざった状態にあり、トレンチ1やトレンチ2の石積下層に類似している。断面石積の状況を見ると方形形状の張り出し部分のベースはほぼ平坦（標高9m）で、ベース上には1石ないし2石を褐色土と混ぜながら石積されていた。また、トレンチ南端から1～1.5m北では、後円部に向かって階段上に石積が高くなっている状況が見られた。現状で確認できる墳丘裾の直線的なラインが後世の改変とするならば、この地点が古墳築造当時の裾ラインの可能性がある。

方形形状の張り出しから北側はベースがゆるやかに傾斜して下っていく。そして、傾斜が水平になるトレンチ北端から3～3.5m南の地点で東西に流れる溝状遺構が検出された。溝状遺構は幅40～50cmで北側が1段深くなる2段構成である。深さは上段12cm、下段で24cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土で、近世陶磁器1点が埋土上位から出土している。この溝状遺構の地点が地表面で観察された窪みの地点に相当することから、古墳区画遺構はないといえる。溝状遺構のさらに北側は1m程平坦地が続いた後、比較的近年と見られる擾乱が見られ、現代の鉄片が数点出土している。

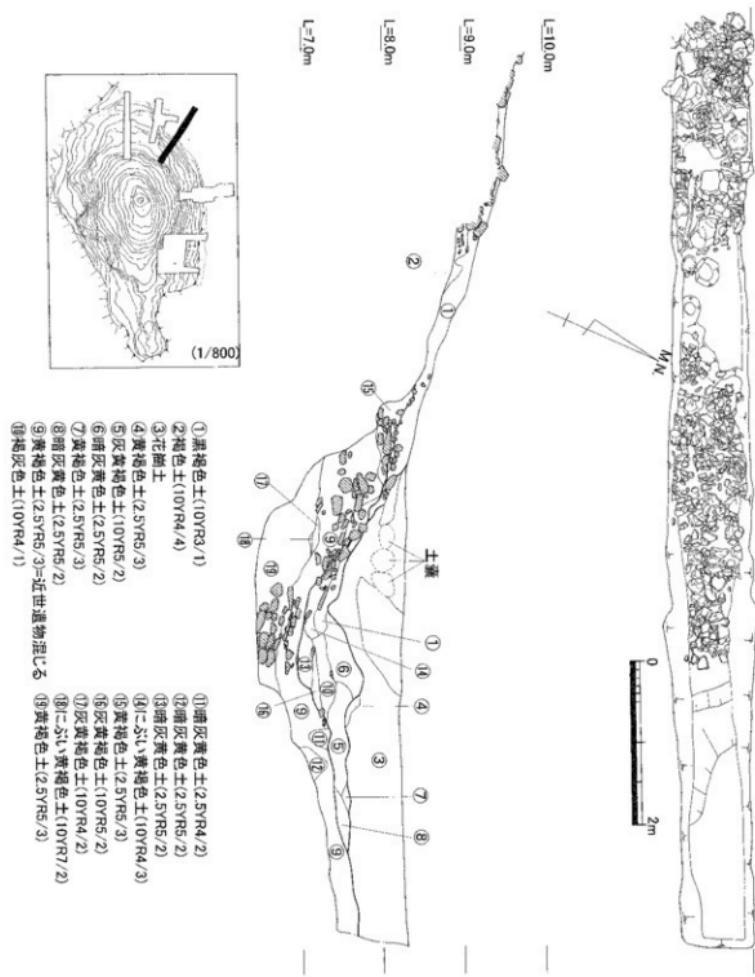
(4) トレンチ4

トレンチ1とトレンチ3で確認できた石積の裾部のみでは古墳範囲の復元が困難であったため、追加・補助データとしてトレンチ4及びトレンチ5を設定した。トレンチ3は尾根上部に位置するのに対し、トレンチ1は傾斜面に位置する。古墳の範囲を復元するには裾部のラインを尾根傾斜面から尾根上に伸ばす必要がある。その具体的な状況を把握するために尾根上の東端にトレンチ5、尾根上に至る直前の尾根傾斜面にトレンチ4を設定した。トレンチ4は後円部立ち上がりを基点として長さ11m、幅1mで設定した。なお、トレンチ4設定箇所は後円部外にある平坦地が北側の方形形状の張り出しとして屈曲する地点であり、方形形状の張り出しの性格解明も同様に目的とした。

表上である小礫混じりの黒褐色土を除去すると上位に小礫、下位に拳大から人頭大の塊石が検出され、方形形状の張り



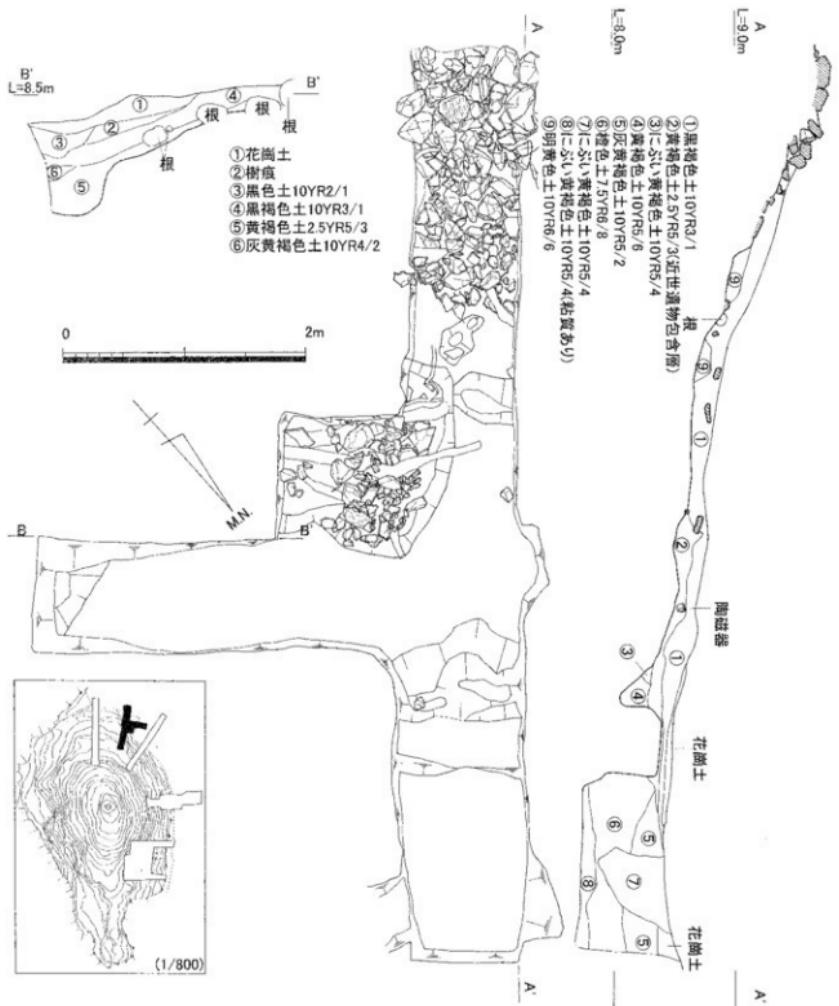
第11図 トレンチ3 平面図及び立面図 (1/60)



第12図 トレンチ4 平面図及び断面図 (1/60)

出し地点であるトレンチ3と類似するが、若干、小礫が少ない傾向にある。石積は平坦地から斜面にかけて確認できるが、斜面は約1mで石積がなくなり、その下は古墳のベースが露出している。この地点までの石積には下層に褐色土が認められることから他のトレンチの石積状況と一致し、古墳築造時と判断できる。また、方形状の張り出しとして屈曲する地点にも石積が見られたことから、この屈曲も古墳築造時のものと理解した。

傾斜面にベースの露出が0.5～1.5mほど続いた下では落ち込みが認められ、その中には再び石積が見られる。石材



第13図 トレンチ5 平面図及び断面図 (1/40)

は拳大ほどの塊石で上方の石積に比べて小さい。この石積は幅3.5~4m、上下端の比高差約2mの範囲に見られる。また、この石積の標高は6.6mで、トレンチ1における石積の標の7.5mよりも約1m低くなっている。石積の裾から先は地山の花崗岩バイラン土の平坦地が30cmほど続いた後に傾斜変換しながら立ち上がる。トレンチ東端では標高7.6mを測ることから、調査区内では約1mの立ち上がりである。

さて、このトレンチ東半で確認された地山の直上には黄褐色土が堆積し近世陶磁器や瓦が多く出土した。そして、この黄褐色土や近世遺物は石積中でも見られたため、石積をはずし内部の確認を行なった。結果、石積内部でも近世の遺物が見られ、黄褐色土が厚く堆積し、ベース・地山は石積上端で見られた落ち込みから急傾斜で落ち込んでいた。のことから、この落ち込みと石積は近世の改変と判断された。

遺物はベースの露出した傾斜面から弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の土器片がまとまって出土した。胎土等が類似しており個体の可能性があるが接合はできなかった。

(5) トレンチ 5

後円部北側の尾根東端部に設置した。トレンチは方形状の張り出しの外側を基点として長さ 7.5 m、幅 1 m で設定し、また、尾根傾斜面との関係を明らかにするために東側に 3 m 延長した。

石積は平坦地から傾斜面にかけて約 1.5 m の範囲で見られ、その北はゆるやかな傾斜となり地山が露出している。

トレンチの北半では黄褐色土の堆積が見られ、近世陶磁器が出土している。また、トレンチ東側の傾斜面では傾斜に平行して落ち込みと小礫が確認できた。そこで東側をさらに 1 m 角で延長したところ石積が確認できたが、この石積には中世から近世にかけての遺物が多く混在しており古墳築造後と判断できる。トレンチ北端から 2.5 m 南では東西にのびる溝状遺構が見られる。この溝状遺構はトレンチ 3 の溝状遺構と埋土が共通し、埋土から近世陶磁器が出土したことから同じ遺構と考えられる。底場はトレンチ 4 が約 15 cm 低く、西から東に向かって水は流れていると考えられる。なお、溝状遺構から 40 cm 離れた北側に擾乱が見られるがこれもトレンチ 3 の擾乱と一連のものである。

東側に延長したトレンチではトレンチ東端から西へ 1.2 m 付近から傾斜が見られ、トレンチ東端付近で急激に落ち込んでいる。

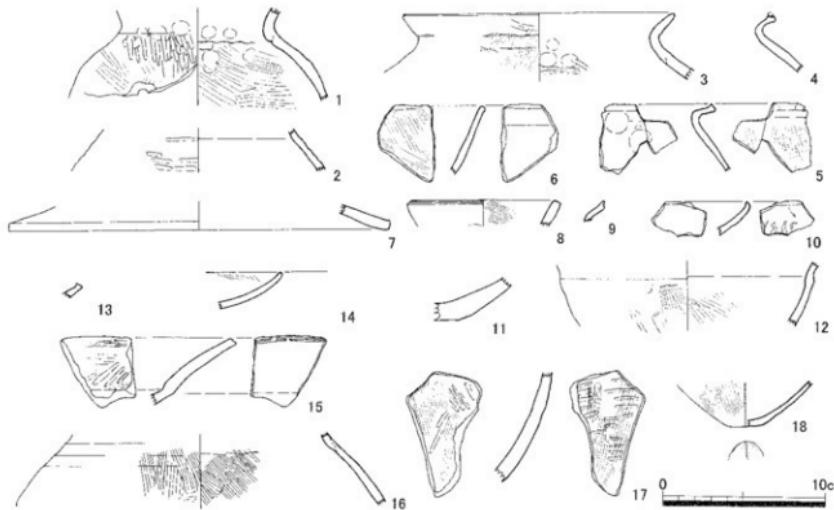
トレンチ 5 の石積の裾には基底石と考えられる石材は見られず、石積が後世に改変された可能性もある。ただ、石積に比較的近い場所から近世の石積や堆積層は確認されたものの石積の裾までは及んでおらず、改変の有無については判断できない。

第 4 章 出土遺物

第 1 節 弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の出土遺物

今回の調査では各トレンチで当時の遺物が出土している。多くは古墳のベース上からの出土であるが、トレンチ 1 の断割りでは石材の下や石材間に充填した褐色土の中から、トレンチ 2 の断割りではベース巾からも出土が認められた。そこで、古墳築造前の遺物の存在が想定された。また、このことはベース上の遺物に古墳築造前の遺物が混入している可能性も推察される。なお、出土した遺物はすべて土器片である。

1～12 は古墳のベース上から出土した遺物である。1 はトレンチ 1 の傾斜面から出土した壺の胴部である。胴部上半に径約 0.7 cm の外側から内側に穿たれた焼成後穿孔が認められる。内外面にハケ、外面の頸部付近にはミガキが見られる。2 はトレンチ 1 の傾斜面から出土した壺の胴部である。外面には頸部屈曲部にかけてタタキが見られる。内面調整は不釘である。3 はトレンチ 1 の仮設道下の表土から出土した甕の口縁部である。口縁部は丸くおさめられ、外面にハケが見られる。4 はトレンチ 1 の傾斜面から出土した甕の口縁部である。内面の屈曲が鈍い。明赤褐色を呈する。5 はトレンチ 1 の傾斜面から出土した甕の口縁部である。やや直線的な胴部からゆるく口縁部にかけて屈曲し、外反するやや長い口縁部をもつ。口縁部は上方につまみ上げ、端部に面をもつ。外面にハケ、内面に指押さえが見られる。胎土に角閃石が見られ褐色を呈する。6 はトレンチ 1 の傾斜面から出土した口縁部である。口縁部は若干肥厚し、端部はわずかな面をもつ。外面は口縁部付近にナデが見られるが下位は十分な調整が見られない。内面はハケが見られる。口縁部の立ち上がりは若干内済する。7 はトレンチ 1 の傾斜面から出土した高杯の底部である。端部に面をもち外側に若干肥厚している。外面に横方向、内面に斜め方向のナデが見られる。8 はトレンチ 1 の傾斜面で出土した小形品の口縁部である。端部はナデにより沈線状になっている。外面にハケが見られる。軟質で色調は橙色である。9 はトレンチ 2 ベース上の小碟中から出土した口縁部である。内面に至る屈曲部がかろうじて残存している。端部は斜めに面をなしている。鉢の口縁部か。10 はトレンチ 2 のベース上から出土した小形鉢の口縁部である。端部は上方につまみ上げている。外面には



第14図 弥生時代終末期～古墳時代初頭の出土遺物 (1/3)

成形時のクラックが見られる。11はトレントチ1の傾斜面から出土した底部である。底部は平底で胸部に丸みがあり角がとれている。外面にハケ、内面調整は不明である。12はトレントチ1の傾斜面から出土した鉢の胸部である。外面の胸部・口縁部の境に強いナデが見られる。色調は橙色である。

13は褐色十から出土した小形鉢の口縁部である。端部がつまみ上げられ、面をもつ。

14～18はベース中からの出土遺物である。14はトレントチ2の断割りによって出土した小形鉢の口縁部である。端部は丸くおさめている。表面の剥落がつよく調整は確認づらいが、内面にかろうじてハケが見られる。15はトレントチ2の断割りによって出土した高杯の口縁部である。环部屈曲部から口縁部にかけて長く外反し、端部はナデにより面をなしている。胎土には角閃石を含む。16はトレントチ2の断割りによって出土した甕か壺の胸部である。内外面にハケが見られる。比較的堅硬でぶい橙色を呈する。17はトレントチ1のベース中から出土した甕か壺の胸部下部である。外面にタタキとハケ、内面にハケが見られる。款質で浅黄褐色を呈する。18はトレントチ1のベース中から出土した底部である。わずかに平底が見られ、胸部は丸みをもながら立ち上がっている。外面にはハケが見られ底部外面まで及んでいる。内面は黒色を呈している。胎土に角閃石を含む。

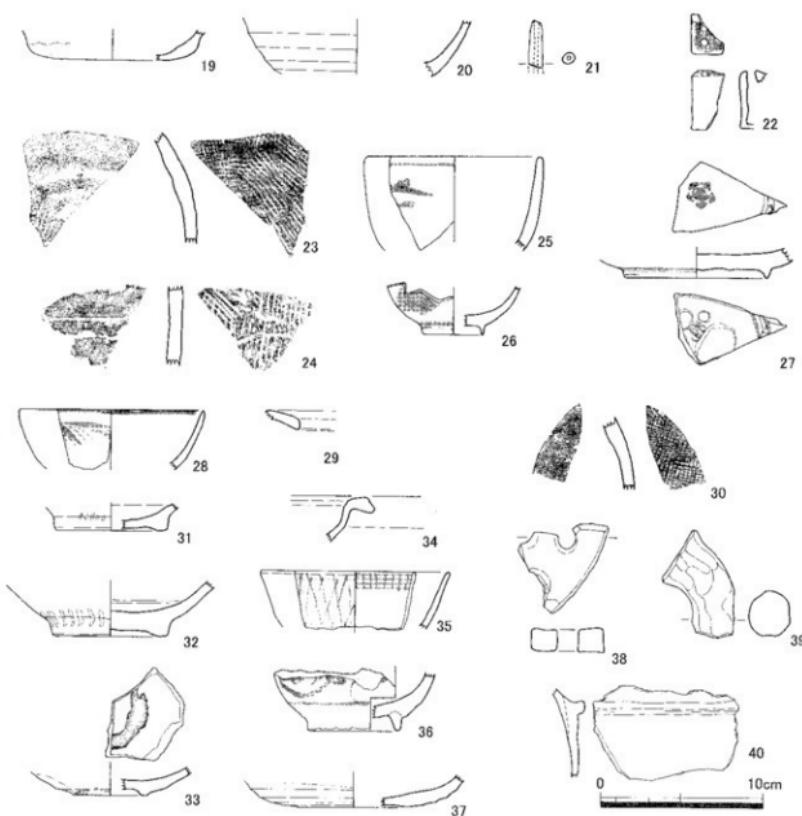
第2節 古墳築造以降の出土遺物

古墳築造後の遺物はトレントチ4、トレントチ5で多く、後円部北側で後世の改変が顕著なことが判明した。

19～21はトレントチ2ベース上の小窓から出土した遺物である。19は土師質土器壺である。体部下端に切り離し時の粘土がはみ出している。底部は器壁が薄い。20は龍泉窯系青磁碗である。体部は内外面ともに無文である。時期は12世紀中頃～後半である。21は管状土鍤で、片方が破損している。

30はトレントチ1右積間の表上から出土した須恵器裏片である。外面に格子タタキ、内面に板ナデが見られる。

22はトレントチ3の溝状遺構から出土した肥前系磁器の水滴である。方形を呈する。時期は17世紀後葉である。トレントチ3の溝状遺構からの出土遺物はこの1点のみであるが、一連のものと考えられるトレントチ5の溝状遺構からは須恵器、肥前系磁器皿等が出土しており、近世の遺構と判断される。



第15図 古墳築造以降の出土遺物 (1/3)

23～27はトレンチ4黄褐色土から出土した。23、24は須恵器表地山直上で出土した。23は外面上に平行タタキ、内面にはナデが見られる。24は外面上に平行タタキ、内面にナデと1条の沈線が見られる。軟質で色調は灰白色を呈する。25は肥前系陶胎染付椀である。器壁が厚く断面の色調が灰褐色を呈する。時期は17世紀中頃である。26は肥前系磁器碗である。時期は18世紀前半である。27は肥前系磁器皿である。底部外面に渦「福」の铭款、見込みに五弁花纹が見られる。時期は18世紀前半である。トレンチ4黄褐色土からは他に瓦の山がある。

28～29はトレンチ5黄褐色土の堆積層の山上である。28は肥前系磁器碗、29は瓦質土器である。

31～40はトレンチ5東側の地山にみられた地形の落ち込みの中から小砾と混在して検出された遺物である。31と32は白磁N類である。色調は31が鈍い黄褐色に対して32は灰白色を呈する。時期は11世紀後半から12世紀前半である。33は肥前系陶器皿である。見込みに砂目が見られる。時期は16世紀末～17世紀初頭である。34は瓦質土器鍋である。胴部から口縁部の屈曲部内面に1条の沈線が見られる。35は肥前系磁器碗である。外面に一重斜格子文、内面の口縁部付近に多重圓線と縱線文が見られる。時期は19世紀前半である。36は肥前系陶胎染付碗である。器壁が厚く、断面には赤い橙色を呈する。時期は17世紀中頃である。37は陶器鍋である。底部外面に右方向のケズリが見られる。

38は焜炉のサナである。色調はにぶい赤褐色を呈する。39,40は上飾質上器足釜である。39が脚部、40が口縁部である。他に固化していないが瓦の出土も認められる。

以上、後円部北側では17~18世紀を中心とした遺物が確認され、当期に鶴の部山古墳北側の開発が指摘される。また、近世の遺物に混ざり中世段階の遺物も数点確認できた。周辺に中世段階の遺跡の存在も考慮する必要があろう。なお、鶴の部山古墳の埴丘上には數ヶ所に火山の凝灰岩を用いた石造物が見られる。後円部北側に転がっているものは宝塔の身で南北朝時代が推測される。その他のものは室町~戦国時代の五輪塔の部材である。これら石造物は他所で出土したものが古墳に集められた可能性と、古墳を墓あるいは供養の対象として再利用した可能性が考えられる。後者とすると、鶴の部山古墳の歴史的経過を考える上で重要であり、また、中世の遺物との関わりも考える必要があろう。ところで、後円部頂に見られる石祠は豊島石製で形態や法量からは17世紀から18世紀前半が想定される。近世の開発と関わるのか今後の課題である。

番号	種別	器種	出土場所	口径	底部	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	壺	T1(ベース上)			角閃・長石・赤粒	不良	にぶい褐(7.5YR5/4)	腹部に穿孔あり
2	土師器	壺?	T1(ベース上)			石英・長石	不良	褐(5YR6/6)	
3	土師器	壺?	T1(ベース上)	16.6		石英・長石	不良	にぶい褐(7.5YR5/4)	
4	土師器	壺?	T1(ベース上)			角閃・石英	良	明赤褐(2.5YR5/8)	
5	土師器	壺?	T1(ベース上)			角閃・雲母	良	褐(7.5YR4/6)	
6	土師器	壺?	T1(ベース上)			石英・長石	不良	にぶい黄褐(10YR7/4)	
7	土師器	高杯	T1(ベース上)	23.2		石英	不良	にぶい橙(7.5YR6/4)	
8	土師器	?	T1(ベース上)	8.6		石英	良	橙(7.5YR7/6)	
9	土師器	鉢?	T2(ベース上)			長石	良	にぶい黄褐(10YR5/3)	
10	土師器	鉢?	T2(ベース上)			石英	良	にぶい赤褐(5YR5/4)	
11	土師器	底盤?	T1(ベース上)			石英	不良	にぶい緑(7.5YR6/4)	
12	土師器	鉢?	T1(ベース上)			精緻	良	橙(2.5YR6/8)	
13	土師器	鉢?	T1(褐色土)			精緻(石英)	良	種(5YR7/6)	
14	土師器	鉢?	T2(ベース中)			精緻(石英)	不良	にぶい橙(7.5YR6/4)	
15	土師器	高杯	T2(ベース中)			角閃・雲母	良	褐(7.5YR6/6)	
16	土師器	壺?	T2(ベース中)			石英・長石	不良	にぶい橙(7.5YR6/4)	
17	土師器	壺?	T1(ベース中)			石英	不良	浅黃褐(7.5YR8/6)	
18	土師器	底盤?	T1(ベース上)	2		角閃	良	褐(7.5YR4/3)	
19	土師器	壺?	T2(ベース上)	7		石英・赤粒	良	浅黃褐(10YR8/4)	
20	青磁	碗	T2(ベース上)			精緻	良	灰オリーブ(7.5YR5/2)	胎土色=褐灰(10YR6/1)
21	土師質	土瓶?	T2(ベース上)			石英・長石	良	褐(5YR6/6)	孔径0.2cm
22	肥磁	水滴	T3(溝)			精緻	良	灰白(10YR8/1)	
23	須恵器	壺?	T4(黄褐色土)			精緻	良	灰(N4/)	
24	須恵器	壺?	T4(黄褐色土)			石英・長石	良	灰白(5YR8/1)	
25	肥陶	碗?	T4(黄褐色土)	10.5		精緻	良	灰白(7.5YR7/2)	胎土色=灰褐(5YR6/2)
26	肥磁	碗?	T4(黄褐色土)	3.6		精緻	良	灰白(10YR8/1)	
27	肥磁	皿?	T4(黄褐色土)	8.4		精緻	良	灰白(10YR8/1)	
28	肥磁	碗?	T5(黄褐色土)	11.2		精緻	良	灰白(5YR7/1)	
29	瓦質	壺?	T5(黄褐色土)			石英	良	にぶい黄褐(10YR6/3)	
30	須恵器	壺?	T1(表土)			精緻	良	黄灰(2.5Y6/1)	
31	白磁	碗?	T5(小様中)	6.7		精緻	良	灰白(10YR8/1)	胎土=にぶい黄褐(10YR7/2)
32	白磁	碗?	T5(小様中)	7		精緻	良	灰白(5YR7/2)	胎土=灰白(N7/)
33	肥陶	皿?	T5(小様中)	4.6		精緻	良	灰オリーブ(5YR6/2)	胎土色=灰黄(2.5YR6/2)
34	瓦質	鍋?	T5(小様中)			石英・長石	良	暗灰(N3/)	
35	肥磁	碗?	T5(小様中)	11.5		精緻	良	灰白(10YR8/1)	
36	肥陶	碗?	T5(小様中)	5.4		精緻	良	灰白(5YR7/1)	胎土=にぶい黄褐(2.5YR6/4)
37	陶器	鍋?	T5(小様中)	6.6		石英	良	にぶい黄褐(10YR6/3)	
38	焜炉	サナ	T5(小様中)			石英	良	灰白(5YR7/1)	
39	土師器	足釜	T5(小様中)			石英・長石	良	にぶい黄褐(10YR6/3)	
40	土師器	足釜	T5(小様中)			石英・長石	良	にぶい黄褐(10YR6/4)	

表1 遺物観察表

第5章 まとめ

第1節 鶴の部山古墳出土遺物について

これまで鶴の部山古墳では遺物の出土が知られていなかったが、今回の調査ではすべて小片であるものの土器片を確認できた。ここでは出土土器の時期的位置付けと出土状況から問題点を指摘したい。

上器片は古墳のベース上や古墳築造時に置かれたと考えられる褐色土、ベース内で確認され、古墳に伴う土器と築造前の上器の両者が想定された。ベース上の遺物には壺、甕、高杯、鉢が見られるが、甕の口縁部が外反しつつやや長いこと、浅皿形態の小形鉢外面に成形時のクラックが見られることから、およそ下川津VI式が指摘できる。一方、古墳築造前と思われる褐色土、ベース内の遺物には屈曲部から口縁部にかけて長く外反する高杯や浅皿形態の小形鉢が見られ、ベース上の遺物と同時期である。全体的に煤の付着した土器片が多く生活の痕跡が見られることや、県内の他の古墳で見られるような広口壺が確認できないことから、今回出土した遺物全てを古墳築造前と考えることも可能である。その場合ベース上の遺物は古墳築造時の地山整形時に表出したものと判断され、古墳の築造時期に関しては古墳時代前期初頭を上限とする指摘に留まる。ただ一方で古墳築造前の遺構は確認できず、また、出土した土器片は從来推定されてきた鶴の部山古墳の時期におよそ合致することから、課題として今後より具体的な状況を深化させる必要があろう。

最後に古墳築造後の遺物に触れておきたい。後円部北側では中世から近世の遺物が出土し、墳丘は一部改変を受けていた。トレンチ2で青磁1点、後円部北側で白磁2点が出土し、後円部北側の墳丘斜面では南北朝期頃の石造宝塔の塔身が見られる。宝塔は供養塔などの宗教的な遺物であり、古墳周辺のものが運ばれてきたのか、古墳上に造塔されたものが転落したのか断定できない。ただ、墳丘斜面に転落している状況からは後者の可能性が高い。仮に後者だとすると古墳が後世も祭祀の対象となっていたことを裏付けるもので、注目される。

第2節 積石方法の特徴について

今回の調査で明らかとなった積石方法の特徴について指摘する。

第1としてトレンチ2のくびれ部では後円部から前方部に向かって弧を巡る石列を検出した。石列は長軸側を正面にして整然と並べられ、トレンチ北端から13石目に大ぶりな石材が、その手前には石材が斜めに置かれていた。この大ぶりの石材から前方部側は直線的に前方部中央に向かってすばり、後円部のような明瞭な石列は確認できない。墳丘全体の位置関係からはこの大ぶりの石材が後円部と前方部の境界の基準として設定されたことが指摘できる。石列の築造順位としては大ぶりの石材が置かれた後に後円部石列が巡らされた可能性と、一旦後円部を円形に巡らした後に大ぶりの石材を置き、その場所にあった後円部石材を斜めに置き直した可能性が推察される。後者の場合後円部が築造された後に前方部が築造されることになる。

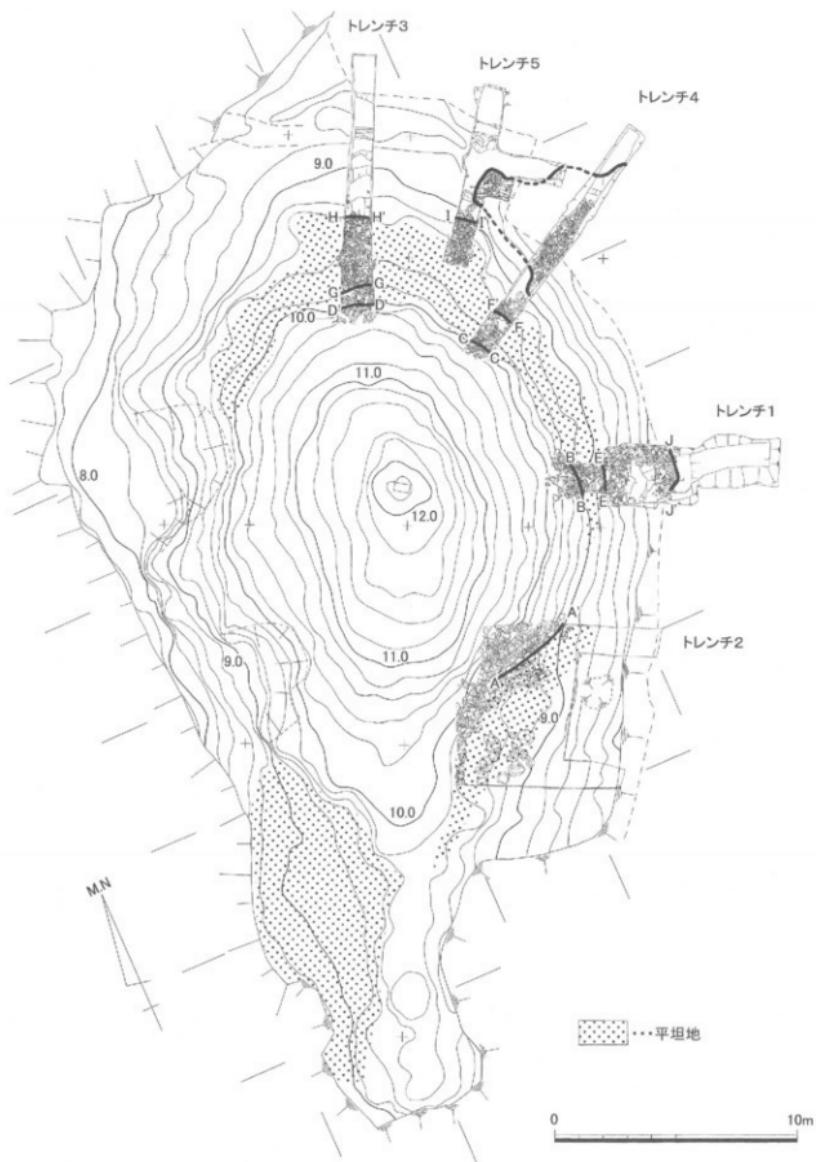
第2として、トレンチ2の北端から2石目は3石目以降の石列からは若干外側に張り出しており、北側の石材はこの2石目に備えて石列を巡らしている。こうした石列方法の意図する所は現段階で十分な解答が見出せないが、作業単位や土木工法上の意図が推測される。

第3として、トレンチ1・2の石列下位で小砾を含む褐色土が確認され、バラスにより石積を安定させる意図が窺われた。

第3節 後円部の形態について

測量・発掘調査の結果明らかとなった後円部の形状や範囲、課題を指摘する。

まず、古墳のベースは花崗バイラン土と花崗バイラン土上の二次堆積土である。二次堆積土はトレンチ2の断面では約20cm堆積していた。古墳はこのベース上に築造されるが、古墳の周囲には地表面観察で平坦地が見られる(網掛けの部分)。この平坦地はトレンチ3・4・5の断面観察ではすべて標高9m、トレンチ2では後円部側が標高9m、前方部側が標高約9.5mとなっていた。また、地表面観察では前方部西側の墳丘外平坦地で岩盤の露出している箇所が



第16図 トレンチ全体図 (1/200)

見られ、標高は9～9.5mである。このように墳丘周辺は広く平坦地が見られ、おおよそベース上で標高9～9.5mを測ることから、古墳築造に際してまず古墳の土台として平坦地を整形したことが指摘できる。なお、後円部東側はベース上に標高約8.5mで他地点よりも低い。これは後円部東側が尾根の傾斜面にまで及んでいる結果と考えられる。

平坦地から上位は石積によって墳丘を築造している。今回の調査ではトレンチ2において後円部から前方部に至る石列が確認できた。石列は弧を描きながら前方部に至っていることから、図面上で弧のライン(A-A')から円の中心点を導くと後円部頂にある石祠の南側に位置する。そして、この点を中心として正円を描くとトレンチ1とトレンチ4では平坦地の外側の傾斜変換点(E-E' と F-F')を通る、トレンチ3では(G-G')を通る。(G-G')は平坦に積まれていた石積みが後円部頂にかけて立ち上がりはじめる地点にほぼ相当する。このように正円の復元ラインは現状で確認できる後円部の立ち上がりのライン(トレンチ1 B-B'・トレンチ4 C-C'・トレンチ3 D-D')よりも外側で確認でき、かつそれは後円部東側で見られる平坦地の外側ラインに相当する。現状の後円部東側の立ち上がりは北半が楕円形状に回っており、復元した正円ラインとの間が平坦地となっているのである。この平坦地では上位に小礫、下位に墳丘で見られるような人頭人の塊礫が見られるが、平坦地と小礫は後に造作された可能性が高い。ただ、今回の調査では小礫中から後世を示す遺物は確認できず断定するには至らなかった。一方、後円部西側は現状で墳丘の立ち上がりは不明瞭ではあるが楕円形を呈しており、正円ラインで復元した場合現状の立ち上がりの外側に復元ラインが還る。後円部西側の状況は今後の西側調査の課題としたい。なお、西側くびれ部に張り出した平坦地は正円ラインから外側に広がっている。このことを考慮すれば、この張り出しは後円部から楕円形状につながるのではなく、明瞭な張り出しとなる可能性があるが、これも今後の課題である。

復元された円の中心からさらに外側のトレンチ3 H-H' ラインで正円を描くとトレンチ5のI-I' とトレンチ1のJ-J' を通過する。H-H' は後円部北側に張り出した平坦地外側の肩に、I-I' は平坦地から若干傾斜した地点、J-J' は平坦地から下った傾斜面の傾斜変換点に相当する。内側の正円ラインと外側の正円ラインに挟まれたこの箇所では古墳のベース上に石積が見られる。積石塚古墳において石積外の自然地形に石列を巡らして墳丘に取り込んでいる例としては高松市鶴尾神社4号墳があり、前方部に続かないことから後円部を視覚的に大きく見せる意図があつたと指摘されている(戸井 1995)。鶴の部山古墳も前方部側のトレンチ2の延長部分では石積が見られず、後円部のみに巡らされていることが指摘できる。これは「墳丘外の段築」もしくは「外周段築」と呼ばれており、これまで鶴の部山古墳でも指摘されていたが、今回の調査で具体的となった。なお、外周段築は後円部北側において平坦地となっている。これは、尾根傾斜面から尾根上に至るために、尾根を立ち切った堀切状の傾斜は造作していない。トレンチ4は尾根傾斜面から尾根上に至る直前に設定し、石積の様子を把握しようとした。ところが積石は傾斜面の途中で途切れ、ベース面を挟んで下位は近世の改変を受けていた。本来は斜面の石積が外側の正円ラインにまで及んでいたものと推察される。

最後に後円部西側について触れておきたい。現状の地形からは後円部北側の外周段築の平坦地は幅を狭めながら後円部西側に至り消滅する。外周段築は鶴尾神社4号墳では東と西で非対称であると指摘されているが、鶴の部山古墳の状況は後円部西側の調査の課題としたい。

第4節 鶴の部山古墳の歴史的な位置付け

今回の調査で鶴の部山古墳の実体が少しづつではあるが明らかとなってきた。まず、築造時期であるが、出土土器が古墳築造時に伴うものと断定はできなかったが、従来指摘されてきた古墳時代前期初頭で、津田湾沿岸の古墳群の中では最高級となる可能性が高くなった。

墳丘構造は石積の墳丘の下位で自然地形に石を巡らした外周段築が確認でき、高松市鶴尾神社4号墳との共通点が見られ、積石塚の墳丘構造が明らかになってきた。また、くびれ部の石積は後円部と前方部の境から前方部中央に向かってぼままでおり、県内で指摘されている在地的な前方後円墳の形態であることが明らかとなった。注目したいのは、これまでの津田湾沿岸山古墳群の位置づけとの関わりである。津田湾沿岸の古墳群の特徴として、埋葬施設の主軸を南北に指向すること、狭長な竪穴式石室、豊富な副葬品が挙げられて在地的ではない畿内の特徴が指摘されているが、鶴の部山古墳は上記の特徴から墳丘形態に極めて在地的な特徴を有する。今後、津田湾の古墳群そしてその背景にある津田湾地域社会の歴史的展開を語る上で鶴の部山古墳の存在は重要であるといえよう。

<参考文献>

- 寺田貞次 1935「讃岐に於ける前方後円墳」『考古学雑誌』25－5
- 津田町教育委員会 1973『ふる里津田の文化財』
- 六車忠一 1965「讃岐津田鴻をめぐる四、五世紀ごろの謎」『文化財協会報』特別号7
- 玉城・枝 1985「讃岐地方の前期古墳をめぐる二、三の問題」『木永先生米寿記念 献呈論文集』
- 津田町教育委員会 1986『津田町史』
- 津田町教育委員会 1986『津田町外史』
- 香川県教育委員会 1989「鶴の部山古墳」『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和63年度』
- 大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『下川津遺跡』
- 藏本晋司 1995「香川県三谷石舟古墳の再検討」『香川考古 第4号』
- 北條芳隆 1999「讃岐型前方後円墳の提唱」『国家形成期の考古学』
- 古野徳久 2000「まとめ」『野牛古墳』
- 古瀬清秀 2002「津田鴻岸をめぐる前期古墳の意味」『岩崎山4号古墳・快天山古墳発掘調査報告書』
- 藏本晋司 2003「四国北東部地域の前半期古墳における石材利用についての基礎的研究」『関西大学考古学研究室開設五十周年記念 考古学論叢』
- 香川県埋蔵文化財センター 2004『大山遺跡・中谷遺跡』
- 大久保徹也 2004「讃岐の古墳時代政治秩序への試論」『古墳時代の政治構造』
- 藏本晋司 2004「丸龜市吉岡神社古墳の再検討」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要X』

学研究室開設五十周年記念 考古学論叢

大串石切場跡

第6章 調査に至る経緯と経過

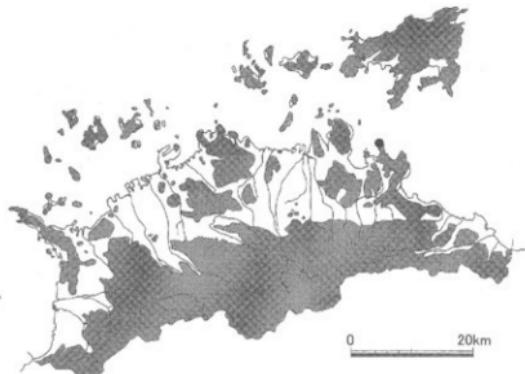
第1節 調査に至る経緯と経過

大串石切場跡はさぬき市小田字松ヶ谷 2671-92 の大串半島に所在する。半島先端の東側に「白粉谷」と呼ばれる谷があり、その斜面に石を切取った石壁、採石痕、工具痕が見られる。石材は地元で「白粉石」と呼ぶ凝灰岩で、軟質で加工が容易である反面もろく劣化しやすい特徴をもつ。この石材を用いた石造物に五輪塔が知られているが、多くは中世段階の製品である。また、家の上台石に使用されたことも指摘されている。

長い間、大串石切場跡の存在は忘れ去られていたが、平成 13 年(2001)年春に平田弘泰、多田伸吾、六車恵一によって良好に残る石切場遺構が確認された。その後、暦応 2 年(1339)、京都府石清水八幡宮の切石に鴨部莊の石材が使われたことを記した「建武回録記」の存在が明らかとなり、当時鴨部莊であった大串石切場跡の石材が使用された可能性が指摘されるに至り歴史的に重要な生産遺跡である認識が高まった。その後、遠藤亮によって石切場跡の具体的な状況が報告され、採石方法、搬送方法、搬送先の問題が指摘されている。

こうした経緯を経て、大串石切場の範囲や構造、採石時期を明らかにすることを目的に今年度は石切場北半分の地形測量調査を実施した。

調査はさぬき市教育委員会が主体となり、大川広域行政組合埋蔵文化財係が担当した。また、地形測量調査は(株)イビソクに委託した。測量調査期間は平成 17 年 2 月 8 日～10 日の 3 日間である。



第 17 図 遺物位置図

第 7 章 周辺の環境

第 1 節 地理的環境

さぬき市旧度町は香川県北東部に位置し、かなりの部分が山塊で占められている。石切場跡の位置する大串半島は小田湾の西端に当たり、半島及び半島南には山塊が続く。半島の西側は江戸時代に北前船の出入した長浜浦があり、その西側には鴨部川が鴨部川流域の沖積平野に通じている。一方、半島東側の小田湾は平地が狭く、南側は山塊に覆われている。このような地形的な制約から内部への石材の搬送には船の使用が想定される。

地質構造は山塊の広い範囲で花崗岩を基盤として、变成古成層が小田、鴨庄で局所的に見られる。一方、新生代第三紀後半の瀬戸内火山帯は北山、小田馬ヶ鼻、大串に見られ、白色の凝灰岩や安山岩、集塊岩が層状に堆積しており、小田馬ヶ鼻と大串に白色の凝灰岩を採石した石切場が確認されている。

第2節 歴史的環境

大串右切場で採石される「白粉石」は中世石造物に多く見られることから中世を中心に記述する。

旧志度町中央に聳える五瀬山により旧志度町は東西に大きく二分されて歴史的に展開してきた。古代は東側の鴨部地区に鴨部郷、西側の志度地区に造田郷が見られ、古代後半に鴨部郷から西大寺領を経て右石清水八幡宮領鴨部村、12世紀後半に造田郷から最勝光院領志度荘の両莊園が成立する。中世に入り鴨部村は鎌倉期から南北朝の騒乱の中で幕府方の所領となり細川氏に与えられ、さらに建仁寺源承寺に寄進される(1487年)。一方、志度荘は鬼室領を経て正中元年(1324)に後宇多上皇による京都府東寺への寄進で東寺領となるが、約30年後の貞応元年以降には「門葉記」や「東寺百合文書」に志度荘に関する記述が見られなくなり東寺の支配がほとんど及ばなくなったと考えられている。なお、文安2年(1445)『兵庫北閑入船納帳』には船籍地として「志度」の名が見られる。室町・戦国時代には鴨部城跡、白川原城跡、池田屋敷跡、志度城跡、小方城跡が見られ、十河一存家臣鴨部源次(鴨部城跡)、安富盛長・多田和泉守恒真(志度城跡)、池田左兵衛正武(池田屋敷跡)、佐藤与左衛門信義(小方城跡)の支配が窺える。

主な寺院は平安時代に鴨部東山の3カ寺として山裾に極楽寺跡、長福寺、来覚寺跡が見える。極楽寺は9世紀に石田から鴨部に移転し、南北朝時に兵乱により現在地である長尾に移転している。寺跡からは上器や瓦、密教法具が出土し、南北朝期の五輪塔が現在も見られる。長福寺は古く北山の山頂にあったものを(峯寺廃寺)9世紀に現在地に移転したと言われる。明治37年(1899)に本堂裏の工事中、甕に入った古銭が出土した(長福寺備布銭)。甕内には表に「九貴文花鐵坊賢秀坊」裏に「文明十二年三月十九日敬白」と書いた木札があり、1480年に埋納されたことが解る。来覚寺は早くに廃寺となっており詳細は不明である。現在、寺跡とされる尾根平坦地には白粉石の五輪塔や寛永8年(1631)銘の豊鳥石製の近世五輪塔が見られる。西山の山裾には鴨部神社の別当寺として西光寺が見えるが現在は廃寺である。当寺にあった木造薬師如来坐像や石塔類は現在長福寺に移転されている。西光寺の北には西方寺があったが貞享4年(1687)に現在地である横井に移転し寺跡には守屋敷の地名が残る。志度地区的志度寺は7世紀の創建が伝えられているが資料に乏しい。寺には平安時代の木造如来形坐像、木造十一面觀音阿彌陀立像や鎌倉時代の絹本著色度守線起、絹本著色十一面觀音像が伝えられている。また境内北側には鎌倉~南北朝頃の海女の墓が見られる。近世には生駒・松平両藩の庇護を受け、墓地内には生駒親正墓があり、松平頼重は本堂、仁王門等を寄進している。

集落遺跡及び中世遺物は志度花池尻中遺跡で10~14世紀の掘立柱建物跡、土壙墓等を検出している。土壙墓では副葬品に鉄製品の短刀や鉄鏃が見られる。花池尻遺跡では7~12世紀の土器片、牛の足跡や掘立柱建物、溝等が検出されている。花池尻北遺跡では古代末から近世にかけての掘立柱建物跡や土坑、井戸等が検出されている。また、鉄津、鉄片が多く出土し、聞き取り調査からは当地が鍛冶屋と呼ばれていたことから、遺跡周辺に鍛冶関連遺構のある可能性が指摘されている。なお、志度には中世以来鍛冶や鉄物師が住んでいたようで、刀工が知られている他丸亀市本島正覺院跡の銘口には永徳元年(1381)の銘と「志度大工沙弥西道」の名が見られる。この他、八丁地遺跡では13世紀から15世紀頃の溝やピットを検出し、岡野松遺跡では「岡野マツ」の伐採工事の際に人骨や礫の入った安土桃山期の備前焼大甕が出土している。また、鴨部東山楠木や鴨部坂手若宮神社、鴨部神社、池田権現付近でも遺物の山上が見られる。

白粉石製の石造物は圧倒的に中世が多い。鎌倉~南北朝期には志度寺海女の墓、極楽寺跡五輪塔、空石塔群、光蓮寺笠塔跡、淡海屋敷石塔群があり五輪塔を中心にして塔、石碑、笠塔婆等が見られる。風化等により多くは記銘が不明だが光蓮寺笠塔婆には「正和三年甲寅初冬」の銘があり、1314年の造塔が窺える。美曾利塚は真珠島の近くに位置し、地元では海女の墓と伝えられている。かつて、白粉石の石塔があったが現在はなくなっている。中世後半には志度城跡石塔群、千歳童子墓、空人乘寺庵石塔群、中空石塔群等があり、造立数の増加と小形化が見られる。石塔種類は五輪塔、宝鏡印塔が多い。なお、上の坊や鴨部伏拝神社では時期が不明ではあるが石仏が見られる。さて、これら石造物の生産地である石切場は今回報告する大串石切場跡の他に馬ヶ鼻石切場、火山石切場の可能性も考えられる。肉眼観察からはこれら3ヶ所の石切場の材質同定は困難であり、これからの課題である。

近世は白粉石の石造物はほとんど見られなくなるが、そのいくつかを紹介する。志度地区には正面石がある。これは寛文10年(1670)志度寺本堂が高松藩主松平頼重の寄進で改築された時に本堂の中心から南正面を示すために造られた六角石柱である。当時は白粉石であったが、現在は花崗岩に造り変えられている。真珠島の灯籠は現在ばらばらの状態で見られる。真珠島は志度寺の鬼門に当たり、生駒正俊のお定書や幕府巡査使が来た時に松平藩主白良が案



- | | | | |
|----------------------|--------------|---------------------|------------|
| 1. 大串石切場跡 | 12. 極楽寺跡 | 18. 西方寺跡（現西方寺に石塔あり） | 29. 千歳童子の墓 |
| 2. 大串砲台跡 | 密教法具出土地 | 19. 西方寺 | 30. 志度城跡 |
| 3. 大串狼煙場跡 | 五輪塔 | 20. 騰部城跡 | 31. 岡野松遺跡 |
| 4. 馬ヶ鼻石切場跡 | 13. 来覚寺跡 | 21. 横木神社遺跡 | 32. 八丁地遺跡 |
| 5. 馬ヶ鼻狼煙場跡 | 五輪塔（寛永 8 年銘） | 22. 上の坊石仏 | 33. 花池尻北遺跡 |
| 6. 小田坂の下五輪塔 | 14. 中空石塔群 | 23. 白川原城跡 | 34. 花池尻中遺跡 |
| 7. 大空石塔群 | 15. 西光寺跡 | 24. 小方城跡 | 35. 花池尻遺跡 |
| 8. 大空葉篠庵石塔群 | 石塔群（現長福寺に在り） | 18. 西方寺跡（現西方寺に石塔あり） | 36. 正面石 |
| 9. 峰寺廃寺 | 16. 伏拝神社・石仏 | 25. 真珠島 白粉石製灯籠 | 37. カシキ塚 |
| 10. 長福寺舊蓄錢
長福寺石塔群 | 17. 池田屋敷跡 | 26. 美曾利塚 | |
| 11. 談義所石塔 | 石造物 | 27. 淡海屋敷石塔群 | |
| | 土師器出土地 | 28. 志度寺・海女の墓 | |

第 18 図 周辺の遺跡

内役をつとめ参拝したことが伝えられている。このように近世の白粉石の石造物は生駒・松平藩主との関わりが推察される。なお、慶安年間以降大串半島は御林（おはえ）として馬の放牧場であった。近世末には海防を意図した狼煙台が大串半島と馬ヶ鼻に、砲台が大串半島に見られる。

第8章 調査の成果



第19図 大串石切場跡と搬送ルート (1/10,000)

第1節 石切場跡の範囲と石材搬出ルート

大串半島先端の東側斜面には東西約100m、南北約80mの俗称白粉谷がある。この谷は傾斜がつよく、周囲から急激に傾斜している。石切場遺構はこの谷の内部に見られる。谷の外側は近世の馬の放牧場や太平洋戦争後の開拓、昭和57年以降のレジャー施設によって開け、現在笹が広がっている中に白粉谷は雑木林として孤立した状態で残されている。谷の東端付近は現在造成土が入れられ、遺構は不明瞭である。

石切場で採石された石材は谷底を通って降ろされたと考えられるが、その後の搬送先は地形的に船を利用した海路の可能性が高い。現在造成土の下には南北に走る道があり、道の東側には細い谷が海岸まで通じている。第1にはこの谷を通じて海岸に石を降ろした可能性が考えられる。この谷は白粉谷北側の延長上に位置する。搬送ルートとして第2に白粉谷から南に至る道を通じて現在の海釣公園の小湾まで運んだ可能性が考えられる。この場合、海釣公園の谷までは一つ屋根を越える必要があり、距離的には前者と比較して長い。現段階ではこの2つのルートを想定したい。

第2節 地形測量調査の成果

上記で指摘した石切場遺構の範囲において今回の調査では北半分の地形測量調査を実施した。谷のほぼ中央に小さな尾根が伸びているが、その尾根北側の小さな谷を南限として20cm等高線で作成した。

石切遺構は上下2段で構成されている。上段の遺構は谷の北西、標高60m付近に位置する。長方形の石材を連続して採石しており、石切遺構は階段状に展開する。石壁の前面には平坦地が広がり、石壁付近は深く抉れている。平坦地付近には採石に伴う転石が見られる。石壁の北側及び西側のやや上位では幅約2.5mの「コ」の字形に採石した箇所が数ヶ所確認でき、試掘坑の可能性が考えられる。

下段の石切遺構は白粉谷の北側に位置し、谷に平行し、東西に伸びている。標高は47～54mで、部分的に2段となっている。石切遺構には採石を途中で中止したものが数ヶ所に見られ、その形状からは五輪塔など中世石造物が採石されていたこと、石壁から直接製品を製作していたことが指摘できる。石壁の前面には上段と同様に平坦地が広がり転石が見られる。

第3節 まとめ

今回取上げた石切遺構は上段と下段で大きく採石方法、採石物、石壁に残された工具痕が異なる。これらは目的とする石造物種の違いや採石された時期差を示している可能性が高く、今後の課題としたい。

<参考文献>

岡村信男 1989『志度の地名史』

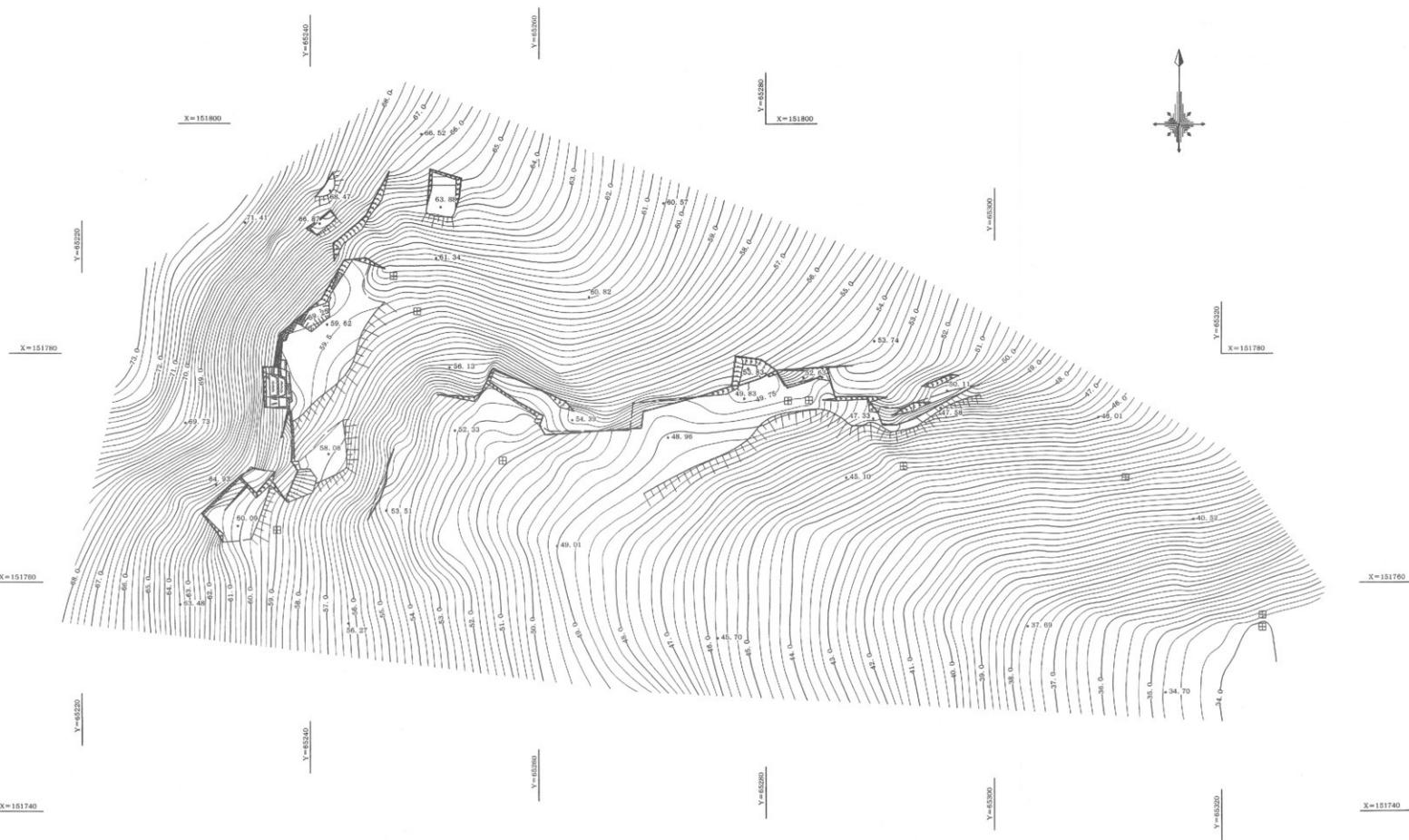
讃岐石造物研究会 2002「讃岐の凝灰岩採石遺跡」『文化財協会報』平成13年度特別号

柏徹哉、松田朝由 2002「香川県に分布する凝灰岩石造物の概要」『二上山凝灰岩の石切場と石造物－生産地と消費地－』

遠藤亮 2002「志度地域 中世採石場と石造物」『郷土誌 志度』第18号

六車惠一 2003「讃岐の石切場遺跡」『香川県史学』30号

遠藤亮 2003「さぬき市志度町 大串石切場遺跡」『香川県史学』30号



第20図 大串石切場跡北半地形測量図 (1/300)



1 瀧の部山古墳全景（南から）



2 後円部（東から）

図版2



1 トレンチ1 全景（東から）



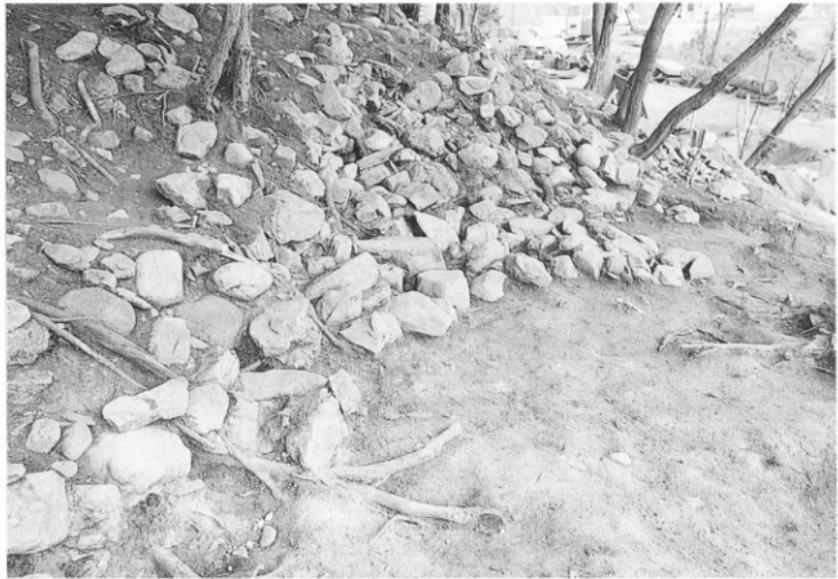
2 トレンチ1 平坦地（北から）



3 トレンチ2 石列下 パラス



4 トレンチ1 遠景（東から）



1 トレンチ2 石列（南から）



2 トレンチ2 石列（東から）

図版4



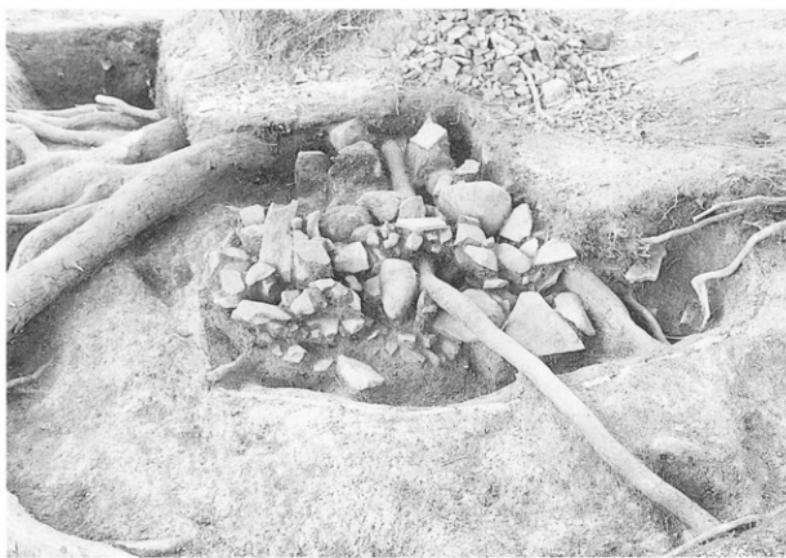
1 トレンチ5 全景（北から）



2 トレンチ3 全景（北から）



3 トレンチ3及びトレンチ5 遠景（北から）



図版6



1 大串石切場跡 上段（北東から）



2 大串石造場跡 下段（南から）

報告書抄録

ふりがな	うのべやまこふん・おおぐしいしきりばあと						
書名	鶴の部山古墳・大串石切場跡						
副書名	平成16年度国庫補助事業埋蔵文化財発掘調査報告書						
編著者名	松田炳由						
編集機関	大川広域行政組合埋蔵文化財係						
発行機関	さぬき市教育委員会						
所在地	〒769-2401 香川県さぬき市津田町津田138-15 TEL0879-42-3107						
発行年月日	西暦 2005年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	′		
鶴の部山古墳	香川県さぬき市津田町鶴羽鶴部1483-1	372064		70° 9' 50"	142° 8' 00"	2004.9.27 ~ 2004.12.24	市内遺跡確認調査
大串石切場跡	香川県さぬき市小田字松ヶ谷2671-92	372064		65° 2' 40"	151° 7' 80"	2005.2.08 ~ 2005.2.10	市内遺跡確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物			特記事項
鶴の部山古墳	古墳	古墳	古墳	土師器・須恵器・輸入陶磁器・近世陶磁器			右列や外周段築を確認し、積石塚の構造が明らかになる
大串石切場跡	生産	中唐頃	石壁、工具痕、採掘痕				上・下2段の石切造構など、石切場の構造が明らかになる

平成16年度国庫補助事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鶴の部山古墳

大串石切場跡

平成17年3月 発行

編集 大川広域行政組合

発行 さぬき市教育委員会

〒769-2492 香川県さぬき市津田町津田138-15

電話 (0879) 42-3107

印刷 ナカハタ印刷株式会社